
Emergency

風野旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Emergency

【Nコード】

N6672V

【作者名】

風野旅人

【あらすじ】

世界樹祭を終え、手持ち無沙汰な大樹とエマ。

世界樹を見上げながら、『エマは魔法が使えない、とは言うものどこから使えないのか?』という話題になり……

※ Infinity発売前に書かれた内容ですので、その辺りはご了承ください。

また、自サイトにて掲載していたものの転載になります。

INFORMATION(前書き)

『MagusTale 〜世界樹と恋する魔法使い〜』の二次創作物です。

同ゲームをプレイ済みであることを前提としている内容ですので、ネタバレ要素が満載です。

また、『Infinity』発売前に書かれた物ですので、その点をご留意下さい。

INFORMATION

どっこーーん……

遠くの空の下から威勢のよい爆裂音が、空気と地面を揺らしながら俺の耳に届いてくる。

「平和だなあ……」

その爆音を耳にしながら、受験に失敗して春を迎えた現実逃避中の学生のような台詞をつぶやいていた。

ぼごーーん……

再び、先ほどとはずれた場所から炸裂音が響いてきた。

「平和ねえ……」

ベンチの背もたれにだらしなく背を預けて座っている女の子が、俺と同じ感想を述べる。

空から降り注ぐのどかな日射しはこの世界でも変わらないものだが、俺たちがいるまわりには不可解な光が立ちこめ、幻想的な雰囲気醸し出していた。

ここでは日常茶飯事のこの光景も、ここに来た当初は相当驚いたものだったが、さすがに一月以上も生活をしていれば慣れてくるものであった。

人間の状況適応能力はすげーぜ、と思わなくもない。

どおおおおん……

その幻想的な雰囲気、先ほどから幾度となく破壊している轟音すらもその日常の一部である。

「お、今のはずいぶん大きかったな」

「どこかの学園生が暴走させちゃったんじゃないの？」

俺も隣に座る女の子同様、すっかりだらけきってベンチの背もたれに身を投げ出していた。

この『時間』は、俺たちのような人間には非常に手持ち無沙汰になる時間だ。

「今日は半日授業だったけど、午後から長めの魔法時間だったからね」

今日のような日は学年末試験に向け、特に進級がかかっている連中には数少ない自主学習時間になっているようだ。

かく言う俺と、そしてこの隣にいる女の子も、進級についてはかなり不味いはずなのだが、如何せんこの時間でしか出来ない課題については、並みいる教師陣ですら砲丸投げばりの大回転でサジを投げている。

それは、先ほどの『魔法時間』という言葉が示す通り、魔法。

——フォーティア魔法学園——

『魔法』などという場違いな単語が混じっていないければ、どこぞの宗教系……だとイメージが悪いからミッシュン系といったほうがいいな……の学園の名前にしか聞こえないだろう。

この学園はその名の通り、『魔法』を教える教育施設なのだ。

残念ながら俺の頭がおかしくなっていない。この目で何度もその魔法を目にしてきたし、的にもされたしな……あれは、一方的にボガードの爺のせいだが。

一月半ほど前、妹に親父の失踪を知らせるためにこの学園に乗り込んで来てから、魔法の使えない転校生として学園に通っている。

以降、試験や世界樹祭という学園祭を経て、魔法に関わるトラブルに巻き込まれながらも、何とか無事に過ごしている。

……まあ、無事というほど円満だったかは、相当怪しいところだったが……

この不思議な光にあたりが包まれる魔法時間内は、魔法を使える素質がある者なら魔法を使うことができ、レベルの高い使い手ならさらなる力を得ることが出来る。

しかし、その素質ゼロの人間には全く持って無意味であるだけでなく、トラブルに巻き込まれやすい時間でもあった。

魔法が使えれば身を守れるが、それが出来ないのだから当然ではあるが。

そんなわけで、もとより魔法の使えない俺と、魔法世界の生まれながら魔法の使えない、この隣に座っている女の子・エマとこうして人がいない場所であつたりしていたりする。

それでも少し前までは、魔法自体に興味があつたこともあり、知り合いの練習を見学したりと、いろいろと足を運んでいたのだが、世界樹祭であつた一件から学園長とボガードから『学園生だけで魔法を使っている場所には近づくな』と言われていた。

理由が理由だけに、従わないわけにもいかなかった俺は、魔法時間になるとこうしてあまり人の近寄らない世界樹の観測施設わきに置かれていたベンチに座って、学園の方や世界樹を眺めていたりすることが多い。

知り合いの連中も、この時間は大抵魔法の練習をしていたりするから、自ずとただただ時間を無為^{むい}に潰していることになる。

まあ、市街とかに出かけてもいいんだろうけど、今はまだ学生的身分、当然あまり金はない。無駄遣い^{むだづかい}などしてしまえば、いくら寮生とはいえ途端^{とんだ}に生活が困窮^{こんきゆう}するだろう。

「天気はいいけど、こうも退屈だと……」

先ほどから背伸びをすることもやめ、お天道様から放たれた光をただただ浴びているエマのこの姿は、アマゾンのナマケモノに失礼なくらいのだらけっぷりである。

今の俺自身も人のことは、全くいえないが。

「というか、なんでこんなところにいるんだ？」

エマが普段からオーラのように発している、極めて無駄の多い、かつ傍迷惑な行動力からすれば、こんなところでダラダラとしていることはあまり考えられない。

昨年末にあった世界樹祭での一悶着のことを考えても、こんな老後のお婆さんが縁側でお茶をすすり始めそうな今のエマは極めて異常であると判断せざる得ないのだが。

「うーん……、最近面白いこと起きないなあ」と……」

「……？　どういう意味だ……？」

何となく言いたいことはわかった気がするのだが、あまり認めたくない事実のため、俺は念のため確認する。

「大樹の周りって、いつも面白いことが起きていたんだけどなあ」横に跳ねている髪をくしゃくしゃといじりながらそんなことをのたまうエマ。

「……それは、俺の近くにいれば、トラブルが起きやすくて楽しい……ということだと理解してよろしいかな？　エマ君」

「さすがワトソン君、極めて明快な推理だねえ」

何が面白いのか、エマはケタケタと人の悪い笑みをこちらにとばしてくる。

「あー……、もう突っ込むことすら面倒だが、とりあえず人を台風か竜巻の中心みたいの評するのはやめてくれ……」

あまりにも予想を真っ向から射抜いていたエマの回答に俺は青筋を浮かべた。

確かに世界樹祭の前後までは、割と積極的に『魔法』に関わっていたため、それに絡んだトラブルに巻き込まれていたことは事実だが、それでも騒動の中心人物として扱われるのは、甚だ心外である。

「でも最近はこの時間になると、大樹の周りって誰もいなくなるわよね。子犬か子ガモみたいに大樹の後ろにくっついてるアリシアもないし……」

いなくなるというより、俺が意識して避けているのだが、余計な

こというと『あのこと』を話さなければならなくなるので黙っておく。

このエマのことである、下手ないいわけ・理由付けは、猪突猛進の好奇心をほどよく刺激して、いらぬ詮索を多大に招くことになるだろう。

触らぬ神に祟りなしならぬ、『触らぬエマにトラブルなし』である。

「みんな忙しいんだろ、知り合いは成績優秀なヤツばかりだから、期末の近いこの時間は修練に励んでいるだろうし」

というわけで、当たり障りのない返事を返しておく、我ながら疑問の余地を挟まない優等生な回答である。

エマは額に人差し指をたて、軽く思案をしてから、
「……アルベルトも……？」

などと、対空迎撃型ソバットのような反撃してきた。

「……俺が悪かった……、ヤツは例外だ」

唯一の例外存在をすっかり失念していた。あいつを含めたら先ほどの回答は残念ながら成立不能である。

思わぬ方向からの急所をつかれて、軽い敗北感を味わう俺に、

「まだまだ甘いね、ワトソン君」

などと得意げにのたまうエマ。

だがその『唯一の例外』の前には、『ここにいない』という但し書きが付くのだが、余計なことを言うとは奥深い墓穴を掘ることになるので黙っておく。

「そういうエマも暇そうだな……」

「世界樹祭終わっちゃったし、年も変わってからこのところ、大したイベントもないしねえ」

最近、魔法時間にこのベンチに座っていると、いつの間にかエマが居たりすることがあるが、俺と同じく魔法が使えないエマにとってもこの時間は暇をもて余していることは確かだろう。

「あゝあ、つまんないの」

ばたんつと大仰な音を立て、再びベンチの背もたれにだらしないのし掛かりながら背伸びをしているエマ。こういつては何だが年頃の女の子とは思えないがさつな態度である。

この大雑把な性格は本人も自覚はあるようなので、わざわざ言うことでも無いのだが。

会話のネタすら無くなった俺たちは、暖かい日の光を浴びて輝く世界樹と不可思議な色に染まった空の中ををゆったりと流れる雲を眺めていた。

時期からすれば冬真っ只中なのだが、四方を海に囲まれた島であるためか、割と暖かい気候をしているため、こうやって外で風に吹かれていても、コートが必要なほど寒いということはない。

海から吹く軽やかな風は、世界樹を囲む下草を柔らかくなびかせている。

全力疾走で駆け抜けるように生きる日本人から見たら信じられないような、ゆったりとした時間がここでは流れていた。

「……これでも、昔は真面目に魔法の勉強してたりしたんだけどな

あ……」

ふと、世界樹の向こうのある空を眺めたままのエマがそんなことをぼやいた。

このエマの『真面目』というのがどこまで真面目なのか、聞いただしたいところであるが。

「そういえば、魔法が使えないって言ってるけど、どの段階から使えないんだ？」

魔法を使えるようになるには、いくつかの段階がある。

まずは素質そのものが全く無い場合だが、さすがにこれはどうにもならないらしい。

次に、世界樹が落とす実を、ラピスという宝石みたいな石に変えられるかどうか。

これは素質があっても、光る（変化するとき発光するのだが）

ことすら無い場合もあれば、変化するどころか砕け散ることもある。
……まあ、砕け散るのは、相当例外らしいが……

基本的にラピスを持つていて、魔法が全く使えないというヤツは今のところ見たことがない。

この段階なら、訓練などで魔法が使えるようになる可能性が出てくると思われるのだが……

「見てわかんない？ 無いでしょう？」

と、俺の目の前に立つと、両手を広げて、その場でクルリと体を一回転させるエマ。

「えー……つまり……」

「そ、ラピス。わたし持って無いのよ」

これまであまり気にしていなかったが、そういえばエマがアクセサリを身につけているのを見たことがない。

この学園の女子学生は、宝石状になったラピスをアクセサリに組み込んで着飾っているのだ。

自他共に認めるガサツさを誇っているエマとはいえど、女の子であることについては何ら変わりはない。つまり、エマはアクセサリを身につけていないのだから、そもそもラピスを持っていなかったということになる。

「……といってもね、実が全く光らなかったら、そもそもこの学園に入学すら出来ないわよ。だから光りはしたのよ、光りは……」

うつむき加減になって、小さくつぶやくエマ。

「……光りはした……？」

まさか砕け散ったということはあるまい、ボガードの爺は砕け散ったのはこれまで見たことが無いと言っていたのだから。

「光りが収まった後、わたしの手にあったのは、元の世界樹の実そのものだったのよ……」

つまり、光りはするものの、ラピスには成らなかったということである。

確かに、これなら魔法の素質はゼロということは無いのだろう。

魔法が使えないエマがこの学園に居ることが出来る理由も分かる。

「だから、入学してからしばらくは、他の人の魔法訓練を見たり、世界樹の実を光らせてラピス化しようとしたり……」

エマも初めの頃は、俺と似たようなことをしていたのだろうが、結局うまくいかなかったわけだ。

砕け散るよりはマシとはいえ、光ってもラピスではなく元の実のままだったというのも、下手に期待させてくれる分、ショックが大きいだろうな……

「必死に……必死に、魔法が使えるようになるために頑張ってきたのに……」

顔を俯かせたまま俺の前に立つ、エマの両肩が震えていた。

「……エマ……」

俺がどう声をかけようか、迷っていると、

「お、お陰で、アルベルトや大樹と同列に並べられて三馬鹿トリオなんていわれるし……」

「へっ？」

予想に反して、顔を上げたエマの両目はかち割り氷のよろしく鋭角にとんがっていた。

一瞬泣いているのでは？ と思った俺が浅はかだった。

エマは激しい怒りによって肩を振るわせていたのである。

「ま、魔法の授業は出られない、魔法が出来ないから成績が酷い、ラピスアクセサリを買いに行くことも出来ない、セーラにはいびられる……、な、何度……何度魔法が使えるヤツらを呪ったか……！！」

恨み辛みに呪いの言葉を駄菓子屋の商品棚のように雑然と並び立てるエマ。

ちなみに魔法が出来ないと、魔法の授業に出られないということはある。エマの場合は単なるさぼりである。

セーラにいびられているというのも、さぼりをとがめられているだけ。

かなり大げさなことを言っているが、自業自得なものもかなり含まれてる気がするぞ。

そもそも、魔法が出来ない云々は、全体の成績には関係ない。

確かに、ここでは魔法の出来る出来ないの重要性は高いことは間違いないが、学園の成績評価としてはその一部でしかない。

エマの場合、英語や数学といった通常の教科すらも壊滅的であるということがそもそも問題なのである。

俺も、その三馬鹿を構成する一人である、人のことはこれっぽちもいえたものではないが。

魔法はラピスが砕け散るくらいなので全く使えない、エマたちと比べれば若干マシという程度の通常学科の成績は平泳ぎで高速巡航、唯一体力だけが取り柄だ。

ちなみに、アルベルトは魔法が使えるものの、いろいろと方向性が間違っているのか、まともに使えた試しがないし、学業成績・身体能力は破滅的である。

エマは運動神経は良いのだが、魔法と学科の成績は前述の通り、尺取り虫が光の速さで這いずり回っているわけだ。

どれもこれも、匍はつているのが地平線か水平線か程度の違いで、匍はつているという意味では全く変わらない、端から見たら誤差の範囲だろう。

こと成績に関しては、エアロトレインもびっくりな超低空飛行を続けている三人である。

……自分で思っ**て**ポロ屋に隙間風が吹き荒れそうなくらい悲しくなったような気がするが、深く考えないようにしよう……

「……なんで……なんで、わたしがこんな思いしなければならないのよっ!!」

遂に大絶叫するエマ。

その怒りに釣りがった口元からは、今にもフシュー、フシューなどと西部の荒野を駆け抜けるバツファローのような息巻きをはじめそうである。

「エ、エマ、おちつけ！」

俺の言葉が耳にすら届かないのか、エマの顔はなまはげすら裸足で逃げ出しそうな般若面の形相になっていた。

「それもこれも……」

エマは、急旋回で後ろを振り向くと、その眼前に立つものを見据え、

「アレのせいだああああ！！！」

呆然としていた俺の前から、猛然と地面を抉りそうなダツシュで駆け抜けて行く。

って、その先は……！？

——世界樹——、すべての魔法の源、ラピスの元となる実をつけ、天候のように魔力を放出し魔法時間を作り出す……

エマは、その世界樹の根元に駆け寄ると、切らした息を整えることすらせず……

「どおおおりやああああああ！！！」

ゲシっ！　ゲシっ！

全力で激しく蹴り出した、あろう事か世界樹の幹を。

あ、あいつなんてことを……！！？

確かに、世界樹の実が光ってもラピス化せず、エマが魔法も使えない原因に世界樹が絡んでいることは疑いは無いが、殆ど……というか完全に八つ当たりだろう。

このどでかい世界樹が、エマが蹴り飛ばしたくらいでどうにかなるようなものではないとは思うが、一応この島では神聖な樹であるのは間違いないし、なにより守護者であるセシルが何かしてこないとも限らない。

「こいつのせいだ！　こいつのせいでええええ！！！」

「こ、こら！ やめろっ！」

追いかけてきた俺は、エマを後ろから抱え上げて、親の敵のごとく世界樹を蹴り飛ばすエマを幹から引き剥がそうとした。

「放せええっ！」

ジタバタと暴れるエマを何とか押さえつけるが、頭が熱湯に放り込まれたタコのように茹^うだりきっているエマは一向におとなしくなる様子はない。

「おまえ、自分が何やっているのか分かってるのか!？」

「見て分かんないの!？」 決まってるでしょう！ 世界樹に蹴り入れているのよっ!!」

「た、頼むから素で返さないでくれっ！」

恐ろしいことに素で返して来やがった。これがエマのマジで怖いところかもしれない。

「大樹！ 邪魔だてするなら、あんたも容赦しないわよっ！」

「なっ!？」

両肩を抱え上げていたにもかかわらず、俺は一瞬にして体を入れ替えられ、エマに背後を取られた。

そして……

「食らええええ!! 『エマファイナル』!!」

ぐぎぎぎぎぎいいいいー!!!!

「ごあつはあ!？」

体中が不可解な軋^{きし}みを上げ、一瞬遅れて激痛が走る。

気を失わないのが不思議なくらいの痛みが全身からくまなく襲ってきて、いったいどこが攻撃されているのか全く分からない。

「エ、エマ……やめ……」

「邪魔者には容赦しないいいいい!!」

エマのけたたましい叫びとともに、さらなる激痛が俺に襲いかかる。情けも容赦も一欠片もない、あまりの痛みに思考が停止しそう

だ。

今の俺が理解出来るのは、想像も出来ない関節技を極められているということ、このままでは命に関わるということ……

や、やばい……早く抜け出さないと……！

しかし、あたりには誰もいない、以前はセーラが止めてくれたが、こんな人気のない場所では叫びを上げても助けが来そうにない。

こんなところで、人のいない場所にいることが仇になったかつ。

「死ねええええええ！！」

「うごくおおお……」

ま、まず……い……、意識が薄れてきた……もはや痛みを感じることもなく、ただ意識が消えかけようとしていた。

脳裏に『死』という極太毛筆体がでかかと白抜きで浮かび上がって見えるのを感じる。残念ながら俺は格闘家でも剣客でもないから必殺技に目覚めたりもしない。

こつんっ……

「ん？」

そのとき、軽い音が聞こえたかと思うと、急にエマの力が抜け、俺を解放する。

消えかけていた意識を総動員して、俺は地面に膝をつく。もう少し遅かったら大の字で地面へとダイブしていたぞ……

いつもながら魔法世界の技は理解できない……本当は魔法を使っているんじゃないのか？ エマは……

「これ、なんだろう？」

「ど、どうかしたのか……」

荒い息を懸命に鎮まらせながら、俺は頭の上に手を置いて首を傾げているエマを見上げた。

「何かが頭の上に落ちてきたみたい」

さっきの何かが跳ねたような音は、その何かがエマの頭に落ちて

きた音だったようである。

エマは自分の髪の中から、落ちてきた物を探り当てると、手のひらにのせてまじまじと見つめている。

「これって……」

「世界樹の実……よね……?」

エマが差し出した手のひらの上には、俺の手の中で幾度となく碎け散り、妹やその友人などからの哀れみの視線を浴び、ボガードの爺から爆笑を浴びせかけられるという、悲しく苦い思い出が詰まった世界樹の実があった。

そして、手にしているエマにとっては、期待させるだけ期待させてラピスに成らないという、鬼か悪魔のような実である。

ほんの1cmも無いくらい小さな実であるが、これによって少なくとも俺たちは振り回されているわけだが……

「なんで、こんなところに落ちてきたんだ?」

この世界樹の実が降り注ぐのは世界樹祭の時だけ、それを祝い、収穫するのがそもそも世界樹祭の本来の目的であるわけだ。

「……枝にでも引っかかっていて、落ちてこなかったんじゃないの?」

エマが蹴り飛ばした衝撃で落ちてきたんじゃないのか? とも思ったが、巨大ロボットが放った飛び蹴りならいざ知らず、このエマが多少暴れて蹴りを入れたくらいではこの巨大な幹はびくともしない。

そもそも、世界樹祭が終わってからしばらく経っている。風に吹かれたにしろ、蹴りの衝撃で落ちてきたにしろ、いまさら枝に引っかかっていた実が落ちてくるのは不自然な気がする。

「それにしても……世界樹って本当に空気読めないわね……」

エマの両目が先ほどのように鋭く細められた。

「空気……?」

エマはその実を握りつぶしかねない（一応普通の人間の握力程度では壊れないらしいが）ほどの力で拳を作ると、またも世界樹に向

き直り、

「怒りの対象をわたしに落としてくるなんて、本当に……本当にいい度胸してるわ！」

再び足を振り上げて蹴りを幹に叩き込もうとする。

「うわ、またか!？」

制裁が怖いのが、放っておくわけにいかないので俺はエマを止めようとしたのだが……

フイイイイイン……

エマの握りしめた拳から眩いばかりの光があふれる。

世界樹の実がラピス化するとき放たれる光だ。

「ちっ、また光るだけなんでしょうけどね」

苦々しく舌打ちするエマ。相当頭に来ているんだろうな……

ほんの数秒、その光はエマと俺を包んでいた。エマの話だとラピスには成らず、実のままであるらしいとのことだが。

「……ん？」

光が収まった後、エマは怪訝な顔を見ると、力一杯握りしめていた拳を緩めて、俺の目の前に手のひらを広げて見せた。

「……………!？」

そして、声を失う。

差し出されたものを見た瞬間、俺もまるで時が止められたかのよう硬直して目を見張っていた。

白みが掛かった紫色——バイオレット——の輝きを放つ半透明の結晶、成るはずが無いものがそこにあった。

「ラ、ラピス……ラピスに成ったんだ……」

エマもあまりの突然の出来事に言葉がうまく紡げていないらしい。間違いない……、俺はすでに諦めていたが、魔法世界の住人であるエマが求めてやまなかった、大抵の人間が魔法を使うために必要となる石、ラピスがその手で輝いていた。

ラピスを手に入れるということは、魔法が使えるようになる可能性が高まったことを示す。

もちろん、単にラピスを手に入れたというだけで、早々魔法が手軽に使えるようになるとは限らない。よっぽど特異な才能の持ち主でもない限り、修練を積んでもしばらくは魔法時間内でなければまともに使うことすらかなわないだろう。

だが、一番高い壁を越えたことは間違いない、特にエマにとっては。

エマは手にしたラピスを日の光にかざし、その煌めきをうつとりと眺めていた。

「これが……わたしのラピス……」

感無量とはこのことだろう、まさに夢にまで見た輝きが自分の手の中にあるのだから。

「やったな、エマ！」

「あ、ありがとう大樹っ！」

ただ気になることがあるとすれば、何故唐突にラピス化が成功したのだろうか？

「きつと無欲と無我の境地によって、世界樹の実がわたしの願いを聞き届けてくれたのよ！」

先ほどのエマの行動は、無欲とか無我とかから無縁というか、月と太陽ほどに遠いと思うのだが……

まあ、本人がこれだけ喜んでいのだから、水を差すのも可哀想な気がするので黙っておくに越したことはない。

「ふふふふふふ……これで……これでっ！ 序列が！ 序列が変わるわ！」

大きな笑みを浮かべたエマは、ラピスを握りしめた拳を突き上げると、学園の方に向けて大地すら揺るがしそうな咆哮を上げる。

「序列って……おいおい……」

おそらく、『序列』というのは我らが三馬鹿内での順位のことだと思う。

現在のところ、

アルベルト	魔法△	勉学×	運動×
エマ	魔法×	勉学×	運動◎
俺	魔法×	勉学×	運動◎

という勢力図であり、ここにエマが魔法を使えるようになると、その優劣にかかわらず、三馬鹿中のトップは揺るぎがないものになるだろう。

……まあ、比較するのが俺たち内だけという時点で、非常に低レベルな争いであることは間違いない。

ドングリと団栗比べても高がしれているのが分かるだけ、成績優秀のアリシアやセーラを比較対象にしろとは言わないが、せめてもう少し別のクラスメイト辺りと比べたいところだ。

リンゴーン…… リンゴーン……

聞き慣れた鐘の音が両耳に届くと同時に、辺りを覆っていた不可思議な魔法の光が次第に輝きを失い、風景は元の色彩を徐々に取り戻してゆく。

魔法時間の終わりを告げる鐘だ。

「あ、おわっちゃった……」

心底残念そうにつぶやくエマ。手に入れたばかりのラピスを用いて、魔法を使おうとしたことは容易に想像出来るが、ハッキリ言って無謀なこときわまりない。

わざわざ核弾頭抱えて地雷原を高笑いしながら通過するような真似に付き合わされること請け合いだ。

命拾いしたのは確実である、特に俺。

ともあれ、ミレーヌ先生でも学園長でも、この際ボガードでもかまわない。とにかく誰でもいいから教師が居るところでやってほし

い。

魔力の暴走騒ぎに巻き込まれるのは出来るだけ避けたいところである。喜んで巻き込まれるヤツは居ないだろうが。

「仕方がないわね、明日の魔法時間に期待するしかないか……」

「明日のお楽しみ……ということの良いじゃないか。別に魔法時間は逃げやしないぞ」

さすがに、俺は一安心だよ……とはいえない……口にした途端、あの不可解な関節技が寸分変わらず襲いかかってくるだろう。

「そうね、とりあえず……」

エマは世界樹に向き直ると、

「世界樹！　ありがとうおお！！　今まで恨んでごめんね！」

巨木に向かって大声で礼を述べ、頭を深く、深く下げるエマであった。が、実に現金なヤツである。

気持ちには分からないでも無いけど。

「さああって、早速明日に向けて魔法の予習よ！」

「！！」

ぐわっ！　エマとは思えない台詞がその口を突いて出てきたぞ！　これがラピスの力なのか……！？　などと不届き千万なことを思ってしまうほどの、衝撃の台詞であった。今の『予習』という言葉は。

「じゃ大樹、また明日ね！」

俺に一言別れを告げると、手に入れたラピスをその手に握りしめ、エマは目にもとまらない速さで学園の方に駆け抜けてゆく。

その姿を呆然と見送った俺は、世界樹の袂に一人取り残された。

「……まあ、いいか。俺も帰ろう……」

いつの間にか日が少し傾き、世界樹を染めるその光にも茜色が混じりはじめていた……

NOTICE

学園から割と離れたところに、俺たちが暮らしている学生寮がある。

外見は普通の寮なのだが、ロビーだけが造りが違うのか、やたらと立派で外面と不釣り合いなデザインをしている。

歴代の偉大な魔法使いの肖像画が掲げられる場所と知れば、この造りも納得はいくけどな。

そういえば、あのスケベ魔法使い・ボガードの爺もここに掲げられることになっているらしい。

俺はその絵が掲げられたら、真っ先にその頭へと芸術的な抽象画を描き込むつもりだ。

さぞかし立派な肖像画へと生まれ変わることだろう。お子様が見たら泣き出しそうなくらいのが。

そんな他愛もないイタズラの予定を立案しながら、ロビーから自室に戻ろうとすると、

「あれ、お兄ちゃん、今帰ってきたんだ？」

一つ下の妹である小雪がちょうど階段から下りてきた。

いつもの学園指定の制服ではなく、私服姿になっている。

「ああ、魔法時間が終わってから戻ってきたからな、そういう小雪はどこにゆくんだ？」

私服に着替えているところからすると、行き先が学園ということは無いただろう。

「ちょっと街まで。あまり時間無いけどお買い物を済ませてこようかと思ったの」

「これから？　ちょっと遅くないか？」

冬場の夕暮れは早い、気が付いたら真っ暗ということも十分あり得る。

「明日も魔法時間があるから、今日のうちにね」

「そんなに気張らなくても、小雪の実力なら日曜の魔法時間一回くらいパスしても大丈夫だろう？」

転入当初から三馬鹿其の三などと呼称されるこの不肖の兄に比べ、小雪は成績は非常に優秀だ。しかも、魔法の実力もあるのだから、そんなに生真面目に修練に勤しむ必要もないと思うのだが。

「うーん、明日は魔法時間だけじゃなくて、ミレーヌ先生から図書館のことも頼まれてるから、あんまり時間ないんだよ」

しかも、本好きで、俺が迂闊に入り込んだりしたら精神力が根こそぎ奪われてゆくという瘴気に満ちた魔の空間・図書館の主と来ている、どこまでもこの兄とは似てもつかない。

「そうか……それじゃしょうがないな……」

とはいえ、街に行くまでは良いが、帰りは日が暮れてしまうだろう。この島は治安が悪いわけではないが、夜道を歩かせるのは兄としては心配だ。

「……仕方がない、俺もついて行くか」

「え、悪いよ……、お兄ちゃん、今帰ってきたばかりなんだし……」

「魔法の使えない俺が魔法時間を何して過ごしてると思ってるんだ。別に疲れてもないから大丈夫だぞ」

魔法が使える奴らなら、魔法時間に魔法を使って消耗しているだろうが、あいにく魔法の使えない俺には無縁の話である。

そもそも唯一誇れる体力を持つ俺には、ちよつとやそつとのことでは疲れ果てたりすることはない。

「お兄ちゃんは、授業時間も体力回復の時間だもんね」

「その通り……って、おい！」

小雪は小さく舌を出して意地悪そうな笑みを見せていた。

あながち否定できないところではあるが、最近は頑張っ起きてるぞ。長くはないが……

「そっか……じゃあ、お願いしようかな」

「ああ、任せておけ」

普段は全く兄らしいところを見せられないのだから、このあたりでポイントを稼いでおかないと、こんなぞんざいな扱いをいつまでも受け続けることになりそうである。

「あ、大樹さんっ！」

ロビーから外に向かおうとした俺たちに、後ろから声が掛けられる。

振り向くと小雪と同学年である双子姉妹の姉、レナが階段を駆け下りて来るのが見えた。

「お、お姉ちゃん、待って……」

その後ろから、妹であるニナが現れる。

レナニナの双子姉妹は、ロビーまで駆け下りてくると玄関の前に立つ俺たちの前にやって来た。

この二人の外見は、高難易度の間違い探しの図柄並みの寸分違わぬそっくりさを誇っているの、見た目だけでは頭飾りになっているラピスアクセサリくらいでしか判別出来ない。

まあ、口調と仕草は全然違うので、話し始めればどちらかは判断できるけどな。

「二人とも、こんな時間からどうしたんだ？」

「これからアルバイトなんです」

妹のニナが俺の問いに口を開いた。

「……そういえば、この前から始めたんだよね……」

そのバイト先について思い出した俺は、軽く頭を抱えた。

紹介したのがあのアルベルトだったという時点で、その方向性はあらぬ方向に定まったも同然だったが、そのバイトとはあろう事か『メイド喫茶』のウェイトレスである。

レナの方は、「メイド服みたいなかわいい服を着てみたいっ！」という一言で決めたらしい。ニナは姉が心配で巻き込まれたというのが正しいだろう。

……まあ、始めた当初に、制服(?)であるメイド服を着て、揃って俺に見せに来たところからすると、ニナの方もまんざら乗り気

ではなかったというわけでもなさそうだったが……

「しかし、いいのかあんなバイトさせて……」

「いいの、いいの。学園の許可は出てるんだから」

俺の懸念を、あっけらかんと何も考えてなさそうな弾んだ笑みで打ち消すレナである。

恐ろしいことに学園の許可済みバイトである。正直、その方針に一抹の不安を覚えざるを得ない。

そもそも、魔法世界には『メイド喫茶』などというものは元々無かったらしい。

セーラの母親である学園長は、こちらの世界——主に日本社会のようだが——の様式を取り入れようとしていることから、こちらの世界に合わせたものが出来、それに携われるなら……と許可した可能性が高いと思われる。

しかし、学園長は、現代の日本社会について色々と取り入れようとしているが、そもそも元々の生活様式の違いから、細かいところで勘違いをしていることもある。

その勘違いを利用して、こちらの世界の『喫茶店』を体験するなどといえば、詳細を確認せずに許可が取れそうな気がするから怖い。……どうせ、真っ先に許可したのは、あのボガードの爺なんだろうけどな……

ところで、諸悪の根源であるアルベルトの方は、その現代日本社会の中でもあからさまに偏ったところから情報を仕入れているらしく、極狭い範囲での趣向を一般常識として認識している節があるように思える。

少なくとも、日本の代表的な『喫茶店』『メイド喫茶』ではないことは、間違いない。というか、真面目に経営しているごく普通の喫茶店が泣くぞ、それは。

「アルベルトとかボガードの爺が、毎日のように入り浸ってそうだな……」

「それなんですけど……」

ニナが控えめに言葉を挟んできた。

「ボガード先生、入店禁止になっちゃたんだよね」

「に、入店禁止？」

俺の隣で首をかしげている小雪。確かに入店禁止とは穏やかではないが……

「はい、店先に張り紙まで張っておりますよ。『ボガード禁止』つて……」

「店内で狼藉でも働いたのか？」

あのスケベ爺のことである、なみいるメイド姿のウェイトレスさんを前にして正気でいられるかどうか疑わしい。

学園内で女子学生の尻を追いかけ回すのと同様に、店内でウェイトレスさんを追いかけ回して、出入り禁止にされた……ということ
は十分に考えられる。

……というか、学園内でやっている時点で、良くクビにならないものだと思う。そんなに偉大なのかあの爺は……

「そうじゃ無いんだけどね」

「わたしたちはともかく、他の子たちが怯えちゃうんですよ……」

「お、怯える……!？」

話を聞いてみると、どうやらボガードの爺はメイド喫茶にやって来るとき、何を勘違いしたのか——いや、ある意味正しいのか?——黒地のスーツ姿で来るというのだ。

確かに黒いスーツ姿にスキンヘッドのグラサン爺が入ってきたら、ヤクザがやって来たと思われるも仕方がない。お店の子が怯えてしまふというのは想定することは出来なくもない。

しかし、果てしなくアホな理由だな……

「アルベルトさんは毎日とは言いませんけど、良く来てますね」

「アルベルトのヤツは、入店禁止とかにはなっていないのか？」

事故を装って風呂を覗くようなヤツである。こちらも危険性で言えば、ボガード爺とタメは張りそうなものだが。

「いちおう、アルベルトさんみたいな人は、お店のターゲットだか

らねえ、それに黙っていればハンサムで通る人だから」

凄まじく打算的な言葉が混じっていることについてはあえて言及しないことにするが、『黙っていれば』という但し書きが付きまとうてしまうのがアルベルトの悲しいところだろう。

そのほとんどが自業自得の結果であるので、一欠片も同情はしないが。

「あははははは……」

俺の隣で、小雪が絨毯爆撃で焦土と化した大地に吹く風のような乾いた笑いをとばしている。

「お姉ちゃん、そろそろ行かないと時間が……」

ニナはロビーに掲げてある時計を指さしながら姉を促す。

「あ、本当だ。それじゃ、大樹さんまたね」

我先にといった感じで玄関を飛び出してゆこうとするレナに、

「俺たちも街に行くところだったんだが」

と声を掛けると、その特徴的なツインテールを巻き込むようにして急旋回してきた。

「そうなんですか？」

「ああ、俺は小雪の付き合いでだな」

飛び出していった姉を追いかけようとしたニナに、俺は親指で小雪を指さしながら答える。

「それじゃ、せっかくだからみんなで一緒に街へしゅっぱーっ！」

「おう」

「はい」

「うん」

それぞれが返事を返し、揃って玄関から外に向かって歩き始める。俺は前に行く三人の後ろ姿を眺めながら、一つ思いついたことがあった。

「なあ、小雪」

「なに？ お兄ちゃん」

声を掛けると小雪が後ろを歩いている俺に振り返る。

「小雪の買い物、時間掛かるのか？」

「ううん、二軒くらいのお店回るだけだから、そんなに時間掛からないと思うけど」

小雪の返答を待ってから俺は言葉を続けた。

「それじゃ悪いが、ちょっと俺の買い物につきあってもらえないか？」



——翌日——

今日も、昨日に引き続いて穏やかな空が世界樹の向こうまで続いている。

今日は本来、日曜日。つまり学園は休みのはずなのだが、昼前から午後にかけて発生する魔法時間のため、割と学生が登校しているようであった。

実際、ここに来るまでに何人かの知り合いや先生達を見かけている。

学園の門を通りすぎたところで、本日の主役であるエマと鉢合わせしたのだが、

「これから、先生達を呼びに行ってくるからっ！」

と言ったまま、どこかへ走り去っていった。しまった。

いきなり一人で魔法を使い始めようということをしなかっただけ、まだ理性があったと思うことにする。

というわけで、魔法時間が来るまで、俺はいつもの如く観測施設そばのベンチに腰を掛けていた。

……隣に、なぜかアルベルトがいるのが気になるのだが……

「なんているんだ？」

「なんでって、エマに呼ばれたんだぞ。『序列の変わる歴史的瞬間

を見に来なさい!』って……」

一応、三馬鹿という括りの中にいるメンツの一人ではあるので、呼ばないわけにはいかなかったと解釈しておこう。

「それに一応、エマの魔法服姿には期待してはいるからな」

大まじめな顔をして余計なことを言うアルベルト。

この世界の魔法使いは、魔法を使用するときこそその専用の服を身にまとった姿に変えることが多い。

魔法を使うこと自体はそんなことをしなくても使えるのだが、威力が上がるとのこと。

また、アルベルトが期待している通り、一律可愛い服装であることは確かだ（言わずもなながら、これは女性限定。男は記憶すらしていない）。

現代日本で言えば、よくあるアニメーションの魔法少女を思い浮かべれば良いと思うが、若干年齢が高すぎるだろうなどと思ったりすると、いろいろと鬼が出そうである。

言わぬが花とはよく言った言葉だな。

「エマも黙っていれば可愛い女の子に分類できるからなあ」

うむうむと鷹揚に頷いてみせるアルベルトだった。

おいおい、昨日、レナがアルベルトを評するときに使った『黙っていれば』が本人の口から飛び出してきましたよ。

こちらは、知らぬが仏か。

「……鏡で自分の顔を、よおーく見た方がいいと思うぞ……」

「うん？ 鏡なら毎朝姿見と手鏡でちゃんと見ているぜ」

などと、アルベルトは見当はずれな応答を返しながら、髪をふさあと掻き上げている。見た目だけなら様になるのだが、如何せん中身を知っている人間から見ると実に滑稽な印象が強い仕草だろう。

そういう意味じゃねえよ。とは当然思ったが言っても無駄な気がしたので放置する。

「そーいや、こっちの世界の魔法服って、おまえの国だと、『コスプレ』って言うんだろう?」

「ぶっ!？」

いくら日本では今のところの流行とはいえ、あまり馴染みすぎた
くない言葉がアルベルトから飛び出してきた。

……この偏り倒したこちらの世界の知識はいたいどこから来て
いるのか、マジで問いただしたいぞ……

「まあ……あながち間違っちゃいないがな……」

当たり障りのない程度に返事を返しておく。

「次なるリニューアルには是非参考にしたいな、コスプレは」

「……リニューアル？」

「ああ、例のメイド喫茶の話さ。アレ俺の発案だぜ」

……マジで諸悪の根源だったのか、コイツ……

アルベルトが言うには、あのメイド喫茶、元々は潰れかけの喫茶
店だったらしい。

そろそろ店をたたもうかと思っていた店主のところに、ナンパに
惜しくも失敗した（本人談）傷心のアルベルトが偶々来店したのが
運の尽きだったのだろう。

アルベルトは、メイド服着たウェイトレスを雇って店を盛り上げ
るという話を持ちかけたらしい。

店主は最初乗り気ではなかったらしいが、アルベルトはこの世界
でメジャーな喫茶店の形式と言い放って畳みかけた模様である。

相当間違っているはずなのだが、まだまだこの世界の情報が少な
いこの島の住人である店主は見事に騙されてしまったのだろう。

なけなしの資金で店舗のリニューアル、そしてアルベルトがどこ
からともなく持ってきたメイド服数着を武器に開店となった。

ちなみに全くの余談だが、その栄えある(?)メイドウェイトレ
スさん第一号は、その店主の娘さんだったらしい。………可哀想
に………

当初から外界の喫茶店様式という触れ込みによっての物珍しさも
あり、客の入りも良く、そしてアルベルトを始めとした『そもそもの
ターゲット』が通ってくるようになって軌道に乗ったとのこと。

……なんというか、どこかで聞いたことがあるような話だな……
で、いずれは『コスプレ喫茶』として再びリニューアルしようと
画策しているらしい。アルベルトは。

しかし、この店を一軒建て直す手腕と情熱を少しでも勉強に向け
れば、もっと良い成績をとれるようになると思うし、使い方さえ間
違えなければ女性との付き合いも可能になりそうなののだがな
……

「コスプレの服ってどんなのがいいんだろうな……」

ベンチに座り、難しい顔で真剣に悩み始めるアルベルト。

コスプレは元になる何かが無ければ成立しないはずなので、そも
そもその元となる何かを知らない人間には変わった服としか目に映
らないと思うのだが。

「大樹、ウェイトレスが魔法服姿というのはどうだ？」

「俺に聞くな、そんなこと……」

『魔法服喫茶』はこの島だと受けないぞ、たぶん。

というか、誰かこの馬鹿を止めろ。このままコイツの所業を放置
しておく、こちらの世界の偏った文化ばかりがこの島に導入され
続けることになりそうで非常に怖い。

……などと、アルベルトの恐るべき計画の一端を聞かされたりし
ていると、今日のヒロインであるエマがこの観測施設までやって来
た。

「二人とも来ているわね」

エマはベンチに座って待っていた俺たちの顔を交互に眺めながら、
満足そうな笑みを向けている。

しかし、俺たちの前に仁王立ちするエマの後ろには誰もいない。

先生達を呼びに行ったのでは無かったのか？

「エマ、先生たちは？」

「ああ、魔法時間前になったら来るって言ってたわよ。ミレーヌ先

生なんて『絶対に行きますから、待っててくださいねっ!』って凄
い期待したみたいで大げさに言ってたし」

と、言いつつ、エマは照れくさそうに頭をかきながら笑顔を見せ
ている。

……それはたぶん『心配だから私が来るまで待っていなさい』と
いう意味だぞ、エマ。

さすがにアルベルトもそのことに気がついたそぶりを見せたが、
あんまりにも嬉しそうにしているエマには何も言えなかったらしい。
まあ下手に口を開くと、疾風すら追い抜くスピードで鉄拳制裁が
飛んできてもおかしくはない雰囲気があるのは間違いない。今のエ
マの笑みにはある種の鬼気迫ったものを感じるからな。

「あと学園長やボガード先生も来るって言ってただけだなあ……」
そう言って、エマは学園の方を見ていたが、誰もこちらに向かっ
てくる様子はない。

俺は自分の腕時計を見てみたが、今日発生する予定の魔法時間ま
であと30分ほどある。エマが単に急いているだけだろう。

「魔法服へ着替える魔法、ちゃんと覚えてきたか？」

下心常時丸出しのアルベルトの問いにも、

「バッチリよっ」

と自信100%といった感じで親指立てて答えるエマであった。
いつにもましてハイテンションのエマであるが、これも致し方が
ないことか。

今まで魔法が全く使えなかったのが、これからは少しは可能性が
出てきたわけだしな……

待ちきれないのか、エマはポケットからあのバイオレットのラピ
スを取り出して、昨日のように日の光に照らして眺めていた。

「それがエマのラピスか……」

アルベルトも釣られて、陽光に閃く宝石を見つめている。

……っと、魔法服で思い出した。

「あ、エマ……」

俺が立ち上がったって声を掛けた瞬間……

俺たちを取り巻く世界がああ、の不思議な色に染まった。

「えっ!?!」

「魔法時間かっ!」

魔法時間の到来。それも予定時間よりもかなり早い。

まだ到来を告げる鐘は鳴っていない。魔法の力を込められたあの鐘の音は、どこにいても聞こえるようになっていて、聞こえなかったということはあり得ない。

そもそも今俺たちが立っている場所は、その鐘がある観測所のすぐ脇である。たとえ物理的な音だけだったとしても聞こえただろう。確かに、魔法時間の発生・終了は天気予報程度の的中率なので、希にはずれることもあるというが……

リンゴーン…… リンゴーン……

遅れて鐘の音があたりに鳴り響いた。

振り向くと、施設の隣に立つやぐらの上で、いつもは硬い表情をしているセシルが若干慌てている様子で鐘に魔力を込めているのが垣間見える。

フイイイイイン!

そのとき別の方向から、耳障りな甲高い音が俺の両耳を叩き付ける。

「な、なに!?!」

エマが慌てたように短く叫ぶ。その音の発信源は……エマの手にあるあのバイオレットのラピスからだったのだ。

いや音だけじゃない、この日の下の中でも目が眩むような膨大な

輝きを放っていた。

「うわっ!？」

「な、何だこの光りは……」

「まぶしいっ!」

綺麗とか美しいという言葉はまるでない、ただ痛みを伴う強烈な光りのみが瞳に届く。

たまらず俺たちは目を覆ったが、焼き付くような鋭い光りは両手を通してでも放たれ続けているのが分かった。

「エ、エマ! いい、いきなり何の魔法を使おうっていうんだ!？」

「し、知らないわよ! ラピスが勝手に光り出したんだからっ!」

イイイイイイン……………

数秒後、頭痛のする音が途絶え、光りがやんだことを感じ取れたところで瞳を開く俺たち。

そして……

「え、えええええ!？」

「なっ!？」

「馬鹿な!？」

俺たちはそれぞれに驚愕の叫びを飛ばし合いながら目を見張る。

そこには絶対にあり得ないはずのものが浮かんでいたからだ。

子供の身の丈ほどの長さをもある両の翼を持った一羽の鳥らしきもの（ぱつと見、鶴に似ている）が、柔らかい白い光を放ちながら優雅に翼をはためかせていたのだった。

「まさか……ラピスがいきなり発現した!？」

「そ、そんなことがあり得るのかっ!？」

魔法の基礎となるラピスは、世界樹からの魔力の吸収やその使用者の熟練が一定レベル以上になれば、発現という状態に遷移し、その使用者に合わせた何らかのものに変化するという。

つまり、今まさに『これから初めて魔法を使います〜♪』みたい

な超初心者であるエマのラピスが発現するというのは常識はずれも甚だしい。

『グアーーーーー!!』

その鶴(?)は、開いた口のふさがらない俺たちを尻目に、先ほどまで鳴り響いていた鐘の音に負けないような、けたたましい鳴き声を一声上げると……

「とんでっちゃった……」

呆然と飛び去ってゆく鳥を見送るエマ。

青い空の中へと舞い上がっていったその鳥は、ゆったりと世界樹の上を旋回しはじめたのだが……

「あ、あれ……なんだ？」

アルベルトが旋回しているその鳥の下の方を指さした。

「どうかしたのか？」

俺とエマが、その指が指しているところに目を凝らすと、

「何か……キラキラしたものが落ちてきてるみたいだけど……」

「ああ、確かに……」

空を舞う鳥の尾翼からキラキラとした粉のようなものが、飛び去った後に続いている。

それらは静かに地面へと降り注いでいるのだが、落ちた後の地面には特に何も起きている様子は見受けられない。

そのとき、旋回の径を大きくしたその鳥が、空を凝視していた俺たちの頭上をあっという間に翔け抜けていった。

……当然、

「うわっ!？」

「キャッ!」

自然とその粉も俺たちに降り注いでくるわけである。

だが、俺やエマの服や肌にかかっても、特に濡れたり、変色したりもしないし、痛みを感じたりもしない。

「何ともない……みたいね……」
エマが安堵したその刹那……

「うあああああああ！？」

俺たちと同様に光の粉を浴びたアルベルトが突然喚きだした。

「ど、どうしたっ!？」

「ちよっと、どうしたのよ!？」

叫びを上げるアルベルトに振り向いた俺たちが見たものは、光りに包まれたアルベルトの姿だった。

その身を包んでいる輝きは、ちょうど先ほどの鳥が放っていた光にそっくりである。

「アルベルト!？」

見る間にその光りは縮んで行き……

そして光りが途絶えた後、そこにはアルベルトの姿は存在していなかった。

「ア、アルベルトが……き、消えちゃったっ!？」

「アルベルト! どこに行った!！」

俺たちは慌てふためいて周りを見渡したが、アルベルトの姿はどこにも見えない。

本当に消えてしまった……!？」

何せ相手は魔法の産物である。何が起きても不思議ではないのだが、今のはどこかに飛ばされたというより消滅させられたように見えたぞ。

「そ、そんな……」

さすがのエマもことの成り行きに愕然としている。

『こ、ここだ! ここだ! だいき、えま!』

そのとき、俺たちの足下から舌足らずな声がした。

「……?」

「……!？」

WARNING

「……とりあえず、落ち着いて考えることにしよう……」

『おちついているばあいか!? はやくなんとかしやがれ!』

その風体に全く似つかわしくない台詞を飛ばしてくる赤ん坊・アルベルト。

どこことなく面影は感じるものの、さすがに赤ん坊では人の判別はつきにくいな。

それでも、俺たちとちゃんと受け答えをしているところから、脳みそまで赤ん坊になってしまったわけでもないの、意思疎通がとれる分、こちらとしては不幸中の幸いだと思う。

「ともかく、わたしたちだけじゃ手に負えそうにないのは間違いないわね」

ようやく落ち着いたエマが言う。まあ、あんな叫び声を上げるのはエマらしくないが、さすがにこれにはびっくりしたようである。

俺もだいぶ場数(?)を踏んできたから、大概の魔法なら驚きもなくなっただけだが、こんな魔法は初めて見たぞ。

しかも、本人の意図しない状態で魔法が動いたままになっているなんて……

「誰か先生方呼びに行った方が良さそうだな」

「そうね」

ここに来る前にエマが呼びに行っていたのだから、学園内には少なくとも学園長やボガードの爺、ミレーヌ先生がいるのは間違いないはずなので、学園に向かえば会えるはずだ。

俺とエマは揃って駆け出そうとしたのだが、

『おい、おれをおいてゆくなよ!』

というアルベルトの言葉に引き留められた。

確かに、赤ん坊になったままのアルベルトをこのまま地面に転がしておくのはいささかまずい気がしてきた。

中身は変わらずとも、外見は完全に赤ん坊である。これでは野良犬でもやって来たらそれこそひとたまりも無いだろう。

そんなことになったらアルベルト相手とはいえ、さすがに夢見が悪そうである。

「しょうがねえ、俺が運んでいつてやるよ」

俺はシャツから首を出して地面に転がっているアルベルト赤ん坊バージョンをそのシャツごと抱え上げる。

『どうせなら、えまにだっこしてもらいたいぜ……』

「なにか言ったか……？」

無論バツチリしつかり聞こえていたのだが、あえて聞こえなかったことにする。

まあ、コイツはこんな状態になっても、その行動原理に些細な変化も見られないということは今の一言で十二分に確認できた。

「さあ、早く行きましょ！」

「ああ」

俺はこのコンパクトになった危険物を抱え、エマとともに学園へと走り始めた。

「……ところで、あの鳥はどこに行ったんだ……？」

「そういえば……どこに行ったんだろう……？」

エマは俺と併走しながら、空を軽く見上げている。

あの鳥、アルベルトが赤ん坊化した後からその姿を見ていない。

もし、あの鳥がばらまく粉を浴びた人間が皆、アルベルトのようになっってしまうとしたら……

「まずいわね……」

「下手したら、島中の人間が赤ん坊化するんじゃないのか……これ……」

想像するだに恐ろしい光景が目に見えかぶ。

アルベルトのこともそうだが、あの鳥を何とかしないと大変なことになるだろう。

「あ！」

走りながらエマが短く叫んだ。

「どうした？」

「あ、あれ！ あそこ！ 学園の上に……」

エマは自分たちが今向かっている先を指さした。

「うわっ！？ あんなどころにいやがった！」

あろう事か学園屋上にあるフェンスに止まっているのが、学園から少し離れたこの場所からもしつかりと見えた。

しかも、先ほどと同様に光ったままで、時折鳴き声を上げる仕草を見せて翼を無駄にばたつかせている。

「光っているからよく目立つわね……」

「ずいぶん目立ちたがり屋だな……あの鳥……」

俺とエマは世界樹の袂から学園の裏手までノンストップで走り抜けてきたが、さすが空飛ぶほうきと自転車で勝負する俺たち二人である、ここまで走り抜けてもあまり息が上がっていないぞ。

我ながら感心する体力だが、魔法優位のこの島にあってはあんまり自慢できる機会がないのが非常に残念ではある。

それはともかく、ここまで来るまでにまだ誰ともすれ違っていいこともあって、今のところ他に被害が出ているのかどうかは分からない。

「エマ、学園長たちはどこに居たんだ？」

「えーと……、学園長はさっきこの辺りで挨拶したんだけど……」

エマはその場で立ち止まると、左右を見渡して学園長の姿を探すが、この近くには居ないようだ。

「いないみたいだな……」

「あ、あそこにいるのセーラじゃない？」

視界の先に、ちょうど校舎の曲がり角から現れた赤い魔法服の少女が垣間見えた。

「本当だ。おい、セーラー！」

アルベルトを抱えている俺は片腕を大きく振り、こちらに歩いて

来るセーラに合図を送った。

「あら二人ともどうしたの？」

俺たちの前にいつものように腕組みして現れたセーラなのだが……

「……………」

「……………」

俺とエマは揃って首を傾げた。

セーラにしては非常に上品な物腰である。いや、別に普通のセーラが下品というわけではない。むしろ上品なのだが、多少乱暴……もとい、若干怒りっぽく、実力行使に出やすい質だが。

しかし、今俺たちの目の前にいるのは、姿形はセーラなのだが受ける印象がまるで違っていた。

腕組みしているとはいえ、その組み方も柔らかく、どこことなく優しげに映る。いつもの刺々しさがまるで無いのだ。

「……？ セーラ、髪型変えた？」

エマが訪ねたとおり、よく見るといつもの横ポニテではなく、半分に分割ったお団子二つを伴った髪に下ろしている。

「……セーラ……？」

と、当のセーラ自身が首を傾げた。

「きゃぁー……！！！」

そのとき、不思議な顔をしているセーラの後ろから切り裂くような甲高い子供の叫び声が響いて来る。

「ワウウウウ、ワンワン！」

さらにその後ろから犬の鳴き声が追いかけてきた。いや、実際小さな女の子が犬に追いかけている。

追いかけているのは、赤い服を着た小さな女の子……なのだが……

長い髪を斜め横で結わえた横ポニーテールに、幼いながらも若干つり上がった目元、そして何よりも腕に巻かれているブレスレット

……

「も、もしかして、アレが……」

「ああ、おそらくあのちびっこいのが……」

「っ！ 天ヶ瀬にエマっ！ た、助けなさいっ！ この猛犬が……」
後ろから追いかけてくる他称・猛犬——俺にはただの子犬にしか見えないが——から必死の形相で逃走してくる子供は、その体躯に似合わないやたらと高飛車な口振りでこちらに救援を求めてきた。

あの口ぶりと犬嫌い……もしかしくなくても……セーラか？ あれ

……

「きゃっ！」

懸命な走りも所詮は子供の駆け足、子犬とはいえ犬の走力にはかなうはずもなく、俺たちのそばに来るよりも前にその猛犬と称される犬に追いつかれ、地面へと押し倒されてしまう。

「やだっ！ や、止めなさい！」

ちびセーラは涙目になって怯えているが、当の子犬は、

「くうん」

ぺろっ ぺろっ ぺろっ

……セーラのほっぺたをナメ上げていた……

これは単にじゃれつかれているだけで、セーラが一方的に怖がっているだけか……

「た、助けて……！」

あゝあ、セーラのヤツ、本格的に泣き出してしまっているぞ。

「あらあら……」

それを見かねた上品なセーラが犬にのし掛かっているちびセーラを地面から抱え上げる。

さすがにちびセーラとは体格差があるので、子犬もそれ以上はまとわりつくことを止めた。

「セーラ……よね……？」

上品なセーラに抱え上げられている、ちびセーラ（非常に紛らわしい）に向かってエマが改めて確認を取った。

「見れば……分からないわよね、確かに……」

ちびセーラは自分の姿を改めて確認すると、若干落ち込んだよう

今までの態度を見ていればセーラ以外にあり得ないのだが、あまり深く言及すると藪から八岐大蛇が出てきかねないので自重しておくことにした。

「やっぱり……」

「やっぱりって……! 天ヶ瀬! あなた、また何かやらかしたんじゃないでしょうね!？」

腕の中でジタバタと暴れるちびセーラを、

と小さい子供をあやすように、その頭を撫ではじめる大人っぽいセーラムみたいな人。実際、中身はともかく、このセーラムは見た目小さな子供であることは間違いないので、何も知らない人が見たら、非常に若いということを除けば、母親があやしている様にしか見えない。

俺の頭の中で、以前世界樹の観測施設を訪れたときにセシルから見せられた古い写真とその姿が重なった。

「ええええ〜~~~~つ!？」

俺の台詞でエマとちびセーラが同時に素っ頓狂な声を上げる。

あつけなくその正体を肯定した上品で大人っぽいセーラらしき人

こと、学園長・エルダであった。

確かに、その古い写真の中にあった姿は今のセーラそっくりだったのだが、実物を見ても本当にうり二つだとは……

最初の『非常に上品なセーラ』ところで気が付きそうなものだったが、あまりにもセーラにそっくりだったのと普段から学園長が着用している魔法服のデザインが若干若々しいものになっていたので、その可能性を無意識に否定していたのだろう。

自分の姿が若返ったというのに、相変わらずのマイペースっぷりを発揮している学園長は、

「よしよし、セーラはこの頃から本当に可愛かったわね」

頬ずりしかねない勢いで、抱きかかえているセーラを撫で上げていたりする。

「お、お母様、やめてくださいっ！」

セーラが顔を真っ赤にして小さな手足を暴れさせるが、学園長はちつとも意に介した様子もない。

俺たちの前では、微笑ましい親子のやり取りが続いており、さすがにその姿に笑いが込み上げてくるのだが、後日山姥か鬼女よろしくな鬼面のセーラに追い掛け回されるのは誠に勝手ながらご遠慮願いたいので、口を噤む事にする。

「ぷっ、セーラ可愛い……」

……懸命な努力による俺の我慢を、砂浜に築城した楼閣を襲う白波の如く一瞬にして無に帰してくださる、エマであった。

口元を押さえてエマは聞こえないように吹き出したつもりだったのだろうが、ばっちり聞こえている。俺にも当然セーラにも。

幼い顔にこれっぽっちも似つかわしくない悪鬼の形相でセーラは俺たちを睨めつける。

「……エマ…… 天ヶ瀬……あとで覚えてなさいよ……！」

「な、なんで俺まで入っている!？」

「さっきからずっと頬の端をひくつかせておいて全然説得力無いわよ！」

俺自身はギリシアの石像にすら負けないポーカーフェイスを装っていたつもりだったが、正直者の俺の顔は嘘がつけなかったらしい。「ところで、大樹君が抱えてるその子は……」

不思議そうな顔をした学園長が俺が抱えている赤ん坊を指さしていた。

「あなたたち二人の子……、というわけでは無さそうね」

「……この状況下でそのギャグは全く笑えないので勘弁してください……」

セーラと同じ顔で、少しばかり品位のない冗談をにこやかに飛ばす我が学園の学園長である。さすがにその発言は洒落にならない。

「ふ、ふ、不潔よ！ 二人とも！」

が、途中で思考停止して最後まで話を聞いていなかった人物が約一名いた。

ケチャップで芸術的な絵を描こうとして大失敗し、ギトギトに塗り固められたオムレツの如く、先ほど以上に幼顔を真っ赤に染めたセーラの罵声が飛んだ。

というか、普通に考えてあり得ない可能性だろうよ、セーラ。

こんな今時お笑いの歯牙にも掛からないお約束のギャグで乱心するというのが、真面目一本気なセーラらしいといえば、実にらしいのだけれども。

「これ、アルベルトですよ」

セーラとは違って学園長のたちの悪い冗談をそよ風の如くスルーしたエマが答えた。

「まあ、わたしたちと同じように若返ってしまったのね」

そうやって俺が抱えている赤ん坊ことアルベルトを覗き込む学園長。

「……この子、寝ているわね。ぐっすりと」

「なに!？」

よく見るとアルベルトのヤツ、すやすやなどと吐息を立てて寝ていやがった。

「通りでさっきから静かだと思ったら……」

この非常時に悠長に寝ていられるのだから、ある意味大物なのかもしれない、アルベルトは。

「ところであなた達、この現象について何か知っているみたいだけど、一体何があったの？」

「それがですね……」

俺とエマは先ほどまでにあった一部始終を洗いざらいに話した。予定よりも早まった魔法時間発生とエマのラピスが輝きだしたと思ったら鳥みたいなものに化けて、飛び去って行ったこと。

そしてその鳥みたいなものが撒き散らした光りの粉を浴びたアルベルトが赤ん坊化してしまったこと。

「なるほどね……エマさんの魔法がある種の暴走をしてしまったるみたいね……」

だっこしたセーラの頭を撫でながら学園長が頷いている。ちなみにセーラの方は嫌がるのを諦めたらしく、学園長のなすがままになっていた。

「セーラや学園長が若返っちゃったのも、あの光の粉が原因なんだろうけど……」

「アルベルトは赤ん坊、セーラは幼児、学園長は俺たちと変わらないくらい……どうやら若返らせる効果には個人差があるみたいだな」
一律赤ん坊だったりしたらそれこそ目も当てられない状況に陥っていたことだろうから、その点は不幸中の幸いといったところか。

頭の中まで若返らないとはいえ、さすがにアルベルトのような状態になってしまうと、対処が難しくなるからな。

「それにしても驚きね、いきなりラピスが発現したりなんて聞いたことも無いわ」

学園長はようやくセーラを地面に下ろし、腕組みをしながら俺たちに向き直る。

しかし、セーラと学園長は普段から親子と言うより姉妹にみえていたが、こう若返って並ぶとちょっと年の離れた姉妹にしか見えな

いな。

「そのわたしのラピス、どこにいったんだろう……」

エマが校舎の屋上を見上げるが、先ほど見かけた場所にはすでに見あたらず、またどこかへ飛び去ってしまっていたようだ。

「学園長、どうしたらいいんでしょう？ さすがにこのまま放っておくのは問題な気が……」

「おそらくここまで効果の強い魔法が維持されているのは、魔法時間中だからだとおもうから、時間が終われば何らかの対策はとれると思うけど……」

「た、対策がとれるようになるだけで……、こ、効果が消えないという可能性もあるかもね」

学園長の言葉に、下から必死にこちらを見上げるセーラがつなげた。いや、セーラそんな親の敵でも見据えた顔で懸命に背伸びしなくても聞こえているから。

「効果が消えないとかは、さすがにないと思いたいけどね」

「わたし、どうしたら……」

さすがに事の重大さが身にしみてきたエマが弱々しい声を吐いた。アルベルト一人が赤ん坊になったくらいならともかく、これほど広範囲に効果が及んでしまっているのが非常に問題だ。

「とりあえず、ボガードに相談するのが良いと思うわ。ボガードなら何らかの対策を知っているかもしれないし」

個人的には、あのエロ爺にあんまり頼りたくはないのが、さすがにこの状況ではそう選り好みしているわけにもいかない。

こと魔法に関してだけなら、学園生からも尊敬されている人物という意味では間違いないからな。

あくまでも、魔法だけだが。

「わかりました。ボガードを探してみます」

「よろしくお願いね。わたしとセーラは学園内を回って、他に巻き込まれている人がいないかを確認してみるわね」

「それじゃ、ちょっとこれをお願いしますか？」

そういつて、俺は抱えていた赤ん坊ことアルベルトを差し出した。いくら軽いとはいえ、さすがにこれを抱えたまま走り回るのは少々キツイ。何せ一応人間ではあるのであんまりぞんざいに扱うわけにもいかないからな。

「分かったわ」

学園長は俺から眠りこけているアルベルトを受け取り、抱きかかえた。

「そういえばさっきわたしが探しに行ったとき、ボガード先生、校門の方から園庭に向かって歩いてたところだったわよ」

「よし、園庭の方を探してみるか。エマ、行くぞ」

俺はエマを促して駆け出そうとしたのだが、

「あ、言い忘れてた……、学園長、そいつに気をつけた方がいいですよ」

足を止めて、学園長に振り返る。

「えっ？」

「見た目は赤ん坊でも、中身はあのアルベルトそのまんまですから俺に言われて、セーラ譲り……ではなく逆か……その血筋に脈々と受け継がれている、全世界の男子の夢と幻想が詰まりきって固まっているとしか思えない、その大盤振る舞いの胸に収まっていたアルベルト赤ん坊をまじまじと見つめる学園長。

『……でへ、でへへへへへ……』

いつの間に目を覚ましていたのか、もはや赤ん坊ではなく地球外生命体かなにかだろう、学園長に抱きかかえられていたアルベルトはその態に極めて似つかわしくない崩れた顔をのぞかせていた。

「きやあああああゝゝゝゝゝゝゝゝゝっ！！」

ぐしゅあっ！！

その手にしていた奇っ怪な生物の正体を確認した瞬間、学園長は思わずその物体を近くに生えていた庭木の中へと叩き込んでしまっ

た。

『ぐはあっ!?!』

アルベルトが消えた庭木の向こうから、くぐもった呻き声が上がった。

……現代一般社会なら幼児虐待で捕まりそうな行為だったが、U
MAを投げ捨てたのだから問題あるまい。

さらば、アルベルト……っ!

ERROR

学内を走る俺たちは、まだ冬も開けてないこの時期から色とりどりの花々が咲く花壇のある中庭に差し掛かった。

この花壇の花は、お互い譲り合うかのように咲き、『互いに咲き誇る』といった感じがしないのは、世話をしている人との人柄がよく出ていると思う。

「あゝゝ！ 大樹君ゝ！」

花壇の間を通り抜けようとしたところで、知った声によって呼び止められた。

この声は……

「あれ、優花先輩じゃない？」

「優花先輩？」

声の方に振り向くと、この花壇の世話をしている一年上の先輩ごと、九条優花先輩が腕をブンブンと大きく振りながらこちらに駆け寄って来る。

「だ、大樹君ゝ！ 大変なことになったよゝ！、ど、どうしようゝ！？」

今にも泣き出しそう……いや、すでに目の縁に涙を溜め込んで、半泣き状態になっていた。

「ど、どうかしましたか！？」

ぱっと見た感じ変わった様子は見受けられない。特にエマの正体不明の若返りの魔法（？）の影響を受けているわけでも無さそうなのだが。

「しょ、小学生くらいに若返っちゃったんだよ！」

「……………」

俺は身じろぎすら出来ずに硬直した。

思考回路が叩き壊れそうな衝撃の発言である。が、ここで操舵を

間違えると取り返しのつかないことになるので、俺は岩礁と氷山に自然防衛されている港を目指す船の気持ちになる。

元から小柄な体格をしている先輩なのだが、本人はそのことをかなり気にしている節が度々感じられるので、その手の話題となると発言には非常に慎重な注意が必要になるのだ。

「ほら、制服がぶかぶかになってるんだよ……」

力のない口振りで目元に溜まった涙を袖で拭き取りながら、その袖を反対の手でつまみ上げる優花先輩。

その仕草も、どうも子供っぽく感じるが、当然ながらそんなことを言及することはできない。

だが、そのブカブカになった範囲も、せいぜい数センチといったところであり、正直誤差の範囲とも言える。

……しかし、「見て分からない？」とか聞かれなくて良かったぜ……聞かれていたとき、馬鹿正直に「分からない」と答えていた可能性が間違いなくあった。

それが巨大な罠だったことも知らずに……

「……そうですか……　ところで、セーラや学園長も同じように若返ってましたよ」

「セ、セーラちゃんや学園長が!？」

素っ頓狂な声で驚く、優花先輩。

「セーラなんて幼稚園生くらいになっちゃったし、アルベルトなんて赤ん坊にまでなっちゃったわよね」

「そうそう」

エマの言葉に頷きながら、俺は先輩の顔を伺う。どうやらやり過ぎせそうである。

「学園長たちが若返ってしまった人を探していますから、ここから裏庭の方に行ってみるとよいですよ」

「うん、分かったよ……」

……俺は実に当たり障りのないことをしゃべってその場を誤魔化した。

下手な台詞は墓穴を掘る可能性が高い、この場はさっさとやり過ぎして、立ち去った方が良さだろう。

だがそのとき、俺のその涙ぐましい努力を無に帰すヤツが隣にいることを失念していた。

「でも、セーラとかと違って、先輩はあんまり見た目変わってませんねえ」

そのとき、周囲5メートルの時間が凍り付いたように止まった。実際身体の芯から湧き出たような寒気を感じたのは気のせいでは無かったと思う。

これ以上無いくらい非常にピュアな感想を述べたエマだが、それはジャックポイント、大当たり、スリーセブン、凶悪な対人地雷、フォロロー不可能。

「そうだよね…… そうなんだよね……」

あ、優花先輩の顔に闇が差し込んだ。

「……せ、先輩？」

俺が50本並べた針すら通す慎重な操舵で華麗に岩礁をすり抜け、巧みな海流予測で氷山をやり過ぎたというのに、エマ砲手長は弾薬過積載の火薬庫で火炎放射器を着火して振り回すような真似をしてくれた。

「こ、ここ数年ね、見た目が全然変わっていないんだよね…… 親戚の子に会うたびに『変わっていないね』って言われるし…… ふ、服のサイズも何年経っても同じなんだよ……」

ああああ、やばい、優花先輩がブラックモードに突入している。

その小さな背中からドロドロとしたどす黒いオーラが漂っているのが、魔法の使えない俺にすら感じ取れた。

「でもいいんだよ！ サイズ変わらないなら、いつも採寸しなくてもお洋服買えるし、何年経ってもわたしを追い抜いてゆく親類の子からのお下がりをお願いもらえるんだよ！」

いや、それってお下がりがなくて、『お上がり』なんじゃ……
などと思ったりもしたが、さすがに口に出すのは憚^{はば}れる。

「むむむむ、胸も無いから服選びに困ったりもしないんだよ。いいでしょう！　ねえ！　いいでしょう！」

優花先輩の思考回路もショートして壊れ始めてきたようである。

話している内容が明後日の方向を向き出しているのだが、本人にはそのような意識はないのだろう。

しかし、この特定部位に関する話題はさらに鬼門だ。特に優花先輩にとっては『誠に残念ながら』という結果となってしまうているから尚更だ。

「え、いや、き、気にすること無いですよ！　ほら、胸ならわたしもないですしっ！」

さすがに自分の先ほどの発言が失言だったことに気が付いたのかエマはフォローを入れる。しかし、エマとしては最大限のフォローを入れたつもりなんだろうが、それは極めて逆効果であった。

そういうエマの胸を、言葉を止めた先輩が凝視したのだが……

「いいよね……普通に胸がある人は……」

遠い目を……いや、もはやどこを見ているかすら読み取れない空虚の瞳がその場でうつろう。

やっぱり、今のエマの言葉はトドメになったようである。

更なる暗黒面へとロケットブースター全点火で突入してゆく先輩。もはや事象の地平線へと真っ逆さまに落ちてゆくだけだった。

ここまで来ると、まわりから引き上げるのは不可能。自力で這い上がってこれるのを待ち望むしかない。

（おい、エマ！　おまえ誰と比べて無いと言っているつもりなのか、考えてしゃべっているのか！？）

（あ、当たり前よ！　そりゃセーラや小雪ちゃんと比べればわたしなんて……）

（ば、馬鹿！　あれは二大巨頭だ！　あんなのと比べて『無い』なんて言っても説得力絶無だろうが！　トドメ刺してどうする！？）

俺とエマは互いに肘で突っつき合いながら、小声で言い合っていた。

「……いいんだよ、いいんだよ、身体の大きさが……胸の大きさが、女の子の価値じゃないんだよ、そう価値じゃないんだよ、価値じゃ……」

呪詛を呟くかのような優花先輩。いや、聞いているだけで胸が締め付けられるような虚しさを感じ、本当に呪われそうな気がするのは間違いないのだが。

「せ、先輩落ち着いて……！　そ、そう価値じゃないんですから！　気にしないでください。気に」

慌てふためいて愛想笑いなんぞ浮かべている俺の脳裏には、港の前にして沈み行く船のイメージが浮かぶ。エマによって放たれた火炎放射は各所で誘爆を起こしまくり、その艦体のあちこちからは爆音と火柱が立ち上っているのだ。

爆沈するくらいなら、自らキングス弁を引っこ抜いて自沈した方がマシだった気がしてきたぞ。

こうなった以上、もはや先輩を宥める努力を放棄して、早々に離脱したいのだが、どうやれば逃げ出せるのか……？

「……………って！？　エ、エマ！　どこに行った！？」

つい先ほどまで俺の隣に立っていたはずのエマが忽然とその姿を消していた。

「だ、大樹く！　後は任せたのでよろしく……！　それじゃ！」

いつの間に離れていたのか、遙か先でこちらに手を振りながら無責任なことを宣^{のたま}ってくれると、ものすごいスピードで走り去って行くエマ。

あ、あいつ！　自分で着火しておきながら先に逃げやがった！

「と、というわけで、先輩！　俺たちボガード探さなきゃいけないので、これで失礼しますっ！」

内心、これ幸いと思いながらも、俺もエマに習ってその場を脱出することにした。俺は先輩に背を向け、エマの後を追いかける。

「う、うわあああああゝゝゝゝゝゝゝん!!」

遂に爆発した優花先輩の泣き声が爆風のように、逃げ惑う俺たちを追いかけた。

「エマ! 退艦命令前の退艦は、軍法会議ものだぞおおお!!」

「な、なにわけ分からないこと言っているのよ! こんな逃げに決まっているわよ!」

CRITICAL

「な、何とか園庭まで来たけど……」

大爆発してしまった優花先輩から逃げ出した俺たちは、エマが最後にボガードの爺を見かけたという校門前の園庭までやって来た。

「だ、誰もいなさそうだな……」

不幸中の幸いか、今のところセーラや学園長、優花先輩の他には被害にあったという人は見かけなかった。

あの鳥が撒き散らす粉を浴びなければ、その効果は無さそうなので1回の効果範囲は狭いようである。

まあ、鳥は空を飛んでいるのだから、その分思いもよらぬところで効果を発揮していそうだが……

「ボガードの爺、どこに行ったんだ……？」

さすがに全力疾走を何セットもしていたので、多少上がっていた息を整えながら俺は園庭を見渡す。

「どこいっちゃったんだろう……？」

「いっつも余計なところで現れて、セクハラ紛いな事ばかりしている癖に、肝心なときに限って現れないとか、ホント使えねえな……」

いないことを良いことに言いたい放題な俺である。

「うーん、そろそろ魔法時間も終わるはずだし、それを待っていた方が安全な気もするけどね」

「それもそうだな…… どちらにしろ、このエマの魔法の効果がちゃんと切れるかどうかの確認がとれた方がいいだろうしな」

何せ本人が意図していない状況なのである。何が起こっても不思議では無いことを鑑みても、魔法時間の終わりという節目を待った方が状況が好転する可能性は十分考えられるのだが。

「はあーあ。ホント、どうしてこんな事になっちゃったんだろう……」

さすがのエマも参り気味のようであった。

「元気出せよエマ、最初からうまく行くヤツなんていやしないだろうし、結果はどうあれ、これだけ凄い魔法が使えるなら、これから期待できるだろう?」

月並みな励みましたが、今の俺に言えるのはこれくらいしかなかった。魔法の使えない俺に言われてもあまり説得力無いだろうけど、それでも応援はしたいのは事実だしな。

「うーん、ありがと、大樹」

エマは大きく背伸びをしてから、俺に微笑みを返してきた。少しは元気になったかな……?

「とりあえず、ボガードの爺は見つからないようだし、学園長のところに戻るか……」

などと、並んで園内をボガードを探して回りながら話していたのだが……

「ふっ、ワシならここにおるぞっ!!」

そのとき、俺たちの頭上から何者かの声が大音響で響き渡る。

「誰だ!?!」

「誰!?!」

見上げた先には、肩に何かを乗せた人物が校舎の屋上から俺たちを見下ろしていた。

遠目なので顔はよく分からないが、姿形から若い男のようである。

「ワシが分からぬか、まあそうじゃろうな! 見よこの華麗なる飛翔を!! とおおおー!!」

その男は自分勝手に納得して、どこぞのヒーローよろしく、いきなり校舎の屋上から飛び降りた!

しかし、垂直方向に急加速するわけでもなく、腕組みしたままスーッと流れるようなスピードで地面へと降り立つ。

スタッと地に足をつけたその男だが、その顔は俺には全く見覚え

がないヤツだった。

年の頃は俺たちと大差ないだろう、スラッとしたスマートな体格にニヒルな笑みを貼り付けていたりする。

そのスマートさを象徴するかのような、身軽なデザインの魔法服を身にまとい、その顔もすれ違った大抵の女性が十分振り向くに値するくらい美形ではあるが……

「……ねえ、大樹……」

「どうかしたか？」

「うまく言えないんだけど、どこかで感じたことがある雰囲気を感じるんだけど……あの人……」

どこことなく不安そうな目でその男を見つめるエマ、しかし、少なくとも学園内での俺たちの知り合いでこんなヤツはいないはずだ。

「まだワシが分からぬか！？」 そうじゃろう、そうじゃろう！ この美青年のワシの姿では、いくらおぬしらの野性の勘でも見破ることは不可能じゃろうなっ」

不審そうな顔を並べている俺たち対して、その男のテンションは絶好調のようである。

少なくとも向こうは俺たちのことを知っているのは間違いないようだ。しかし、野生の勘とか何気に酷い言われような気がするぞ。

「ちっ、まだ分らんのか、仕方がない。来い！」

その男は、首をかしげる俺たちにしびれを切らしたのか、忌々しそうに指をパチンなどとならした。

バサバサ……

羽音が空から降りてくると、その男の肩に留まったのは鷹であった。

「鷹……！？ ま、まさか！？」

俺たちが今巻き込まれている事象が何であったかを思いだし、そしてその結果が目の前にいるのである。

「ボ、ボガード……先生……！？ うそ……」

エマも自分の目を擦りつけながら疑いのまなざしを向けていた。

しかし、懸命にいくら目をこすつても、この幻覚は消えそうにないようだ。

「エマ……残念ながら、目の前にいるヤツは夢でも幻でも無さそうだぞ。ちゃんと俺にも見えているからな」

この微妙なテンションで気が付かなかったのは不覚だった。俺自身もこの見た目に騙されていたということに他ならないだろう。

そう、この見た目から絶対にあり得ない可能性を無意識に否定していたのである。

「あのスケベ爺の若い頃がこんなだったとは、さすがに誰も予想はできないぜ……」

学園長の若い頃がセーラとそっくりだったというのはまだ納得しようもあるが、あの女子学生の尻を追いかけまわすしか能が無さそうなドスケベ教師ボガードの若い頃がこんな美形だったというのは想定外もいいところだろう。

それにしても、この外見が若返る魔法、いくらなんでも^{さかのぼ}遡る効果に個人差がありすぎだろ、これ。

「そう、その通り！　これが新たなるワシの姿じゃ！」

そう無意味に胸を張って宣言するボガードであった。

「……………なんか、無駄にテンション高くなってるんだけど…………ボガード先生…………」

「まあ、気持ちは分からなくも無いけどな……いきなりヨボヨボの爺から若返ったりしたんだし……」

不安というか、何か痛々しいものを見る目をしているエマ。

「見よ！　このフサッフサッフの髪を！」

ボガードは右手でその黒い髪を掻き上げて風に流した。実に様になるのが癪なくらいであるが。

「これでメイド喫茶に行っても、メイドさんに逃げられたり、店を追出されたりしないはずじゃっ！」

コイツ、メイド喫茶に入店禁止になったことをやっぱりまだ根に持っていたようである。

「……メイド喫茶？ 大樹、何なのか知ってる？」

「ああ、ウェイトレスの女の子がメイド服着て給仕してくれるという喫茶店のことだ」

それをあのアルベルトが黒幕になって、この島に作ったということは後で説明することにする。

「それって嬉しいの男の人は……？」

エマが訝しげな顔で首を傾げている。まあ、コスプレとかの概念が無ければ当然の反応だと思うが。

「極一部の偏った趣向を持つ人間から絶大な支持があるらしいぞ」俺は日本にいた頃にもその手の喫茶店に行ったことは無いから詳しいことは知らんけど、好きなやつは毎日のように通うらしいな。

まあ、最近はメディアで取り上げまくられた反動で、普通の一般客の方が増えているらしいとはどこかの雑誌なんかで読んだ覚えはあるが。

「いやむしろ、メイドさんたちがこぞって給仕に来てくれるやもしれんぞお!!」

あんまりにも普段……いや、普段の5割り増しくらいのボガード節丸出しの言葉に、俺は少々切ない気分に迫いやられた。

美青年と自称しているだけあって、見た目がかなり良い線をしているにもかかわらず、中身がそのままであるのだからその残念さ加減は計り知れない。

「これで……これで！ ワシもモテモテ間違いなしじゃああああああああ!!」

『モテモテ』のところに、小節を利かせたようなみよーなアクセントをつけ、欲望の権化と化して叫ぶエロ爺。

「……大樹……」

「なんだ……？」

「ものすご〜く、あのボガード先生にデジャビュを感じるんだけど……」

「……言うな、俺にも分かっている」

デジャビュ……日本語では既視感というらしいが、『既に視た感じ』というそのまんまな漢字が当てはめられているわけである。今この目の前にいる若ボガード、正に見た覚えがあるのは間違いない。見た目は美形、だが中身はとんでもないエロ野郎。これに当てはまるのは我らが三馬鹿の一角、たとえ赤ん坊と化してもそのスケベ心なお衰えずなあアルベルトが思い当たったのは、極めて自然なことだろう。

「はあ……外見がよくても、中身があれじゃ……アルベルトの二の舞が関の山な気がするわよねえ……」

エマがため息混じりに呟いた。……って、エマ、お前わざとやっているだろう!?

「な、ななな、なんじゃとおおお!!」

案の定、耳ざとくエマのその致命的な一言を聞きつけたボガードがいきなり激昂する。さすがにアルベルトと同格とされたのはけなしのプライドが許さなかったか。

「こ、小僧! 相変わらずいい度胸しておるなあ!」

鋭い眼光で俺を睨めつけてくるボガード。端から見たらえらく様になっているはずなのだが、怒りの内容があんまりにもあんまりなので、全然格好良くない。

……というか……

「ちょ、ちょっとまって! だから何で俺が喧嘩売ったことになっているんだ!?!」

「決まるとるじやろうが、お前のような小僧いざ知らず、このジェントルマンなこのワシが婦女子に手を上げるなんて出来るわけ無いじやろう!」

「ああ、そういうことか……じゃねえ! てめえ、俺のことを攻撃する気満々、ということかよ!!」

なんて不条理なヤツだ。腐っても教師だと思っではいたのだが、やっぱりただの変な爺というのは揺るぎない事実のままであったようだ。

「当たり前じゃ！　そもそも、いたいけな女子を取っ替え引っ替えしている貴様のような非道の悪党は、このあたりで成敗しておく必要があるからもう！」

ボガードはビシッと俺を指さし、格好良く決めているつもりなんだろうが、言っていることは単なる妬み以外の何物でもないのです、実際には滑稽さだけが際だっていただけであつた。

「……うゝん、確かにそーよねゝ　大樹は会うたんびに違う女の子というし……アリシアにセーラに小雪ちゃんに優花先輩にレナニナちゃんに……、他にも学園長ともミレーヌ先生とも仲が良いし……、………なんか、妙に腹立ってくるわね………」

「おいこらエマ！　お前どっちの味方なんだよ！？」

いきなりエマがこの若ボガードの戯言に迎合するようなことを言い立て始めたので、慌てふためく俺。

エマも困った顔をしながら、

「とーぜん、大樹の味方なんだけど、この件についてはね……　あゝあ、どうしてこんなヤツにわたしが……」

などと、頭を掻いて口を尖らせていた。

「……どういう意味に取ったらいいか判断に迷う答え方するのはやめてくれ……」

「今は……まだどうにでもとれる言葉として受け取っておいて欲しいかな？　まあ、予約ということだ」

「……えゝゝ、それはつまり……」

「こ、こここ、小僧！　このワシを無視していちゃついているとは……ふざけるのも大概にせんかつ！」

あゝ、向こうは完全にそっちの意味で受け取りやがったぞ、まあ、ボガードのスケベ爺ではそっちにしか思考が行かないのは無理もないが。

「もはや一片の慈悲も必要ないじゃろう！　ここで因縁の決着をつけてやるわ！」

ボガードの爺はフトコロから、いつも着用に及んでいたグラサン

を取り出すと、

「戦闘モード！ ライトニングボガード！！ 見参！」

などと叫びながら装着し、決めポーズを取っている。

……この魔法世界にも特撮ドラマとかあったのか疑いたくなるような台詞なんだが……

「なあ、エマ。魔法世界にも特撮って存在してんのか？」

「とくさつ？ 何それ？」

「若いにーちゃんねーちゃんが、魔法服みたいな変わった服着て、格闘したり、重火器ぶっ放すドラマだ」

一部誤解を招きそうな表現が混じっているが、子供の頃に見た程度で詳しく知らない俺にはこの程度の解説くらいしか出来ない。

「……元々は無いわね。こっちの世界に来たときに外から入ってきた映画で、そういうのを知ってる人はいるかもしれないけど……」

「行くぞ！ 小僧！」

若ボガードが無駄に気合いを入れた叫びを上げる。

そして、ボガードの肩に乗っている鷹型のラピスの双眸そうぼうが閃いたのが垣間見えた。

「エマ、魔法が来るぞ！ 早く逃げろ！」

俺は素早くエマから離れ、たとえば火球が炸裂したとしても大丈夫な距離を取る。今の俺なら運悪く直撃を食らったとしても問題は無いからだ。

「ふんっ、アーティカルバイス！」

魔法を起動させる時に、頻繁に使われる言葉がボガードの口を突く。

炎か？ それもと雷か！？

しかし、魔法が飛んでくることは無かった。しかも、ボガードの鷹はこちらではなく正反対の後ろを向いていたのだった。

「ひっさあーっ！ ボガード・ダイナミイイイックウウウウウ
！！」

握りしめた拳をこちらに向けながら、ボガードが特撮ドラマその

まんまな台詞を叫ぶ。

ゴ
オ
オ
オ
オ
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
！
！
！

肩に乗っている鷹型のラピスから、ガスバーナーの炎を大型化したような火炎が噴射され……

「な、なにー！ー！？」

気が付いたときには、ボガードの拳が眼前に迫ってきていた。

俺はとっさに身をかがめて横つ飛びし、庭木に突っ込みながらも何とかその拳を避けることが出来たのだが、

どごおおん！
ブオオオオー！

「うぷっ！」

「きやあつ！」

轟音と突風が吹き荒れ、俺は庭木に押しつけられる。少し離れたところにいたエマもスカートの裾を押さえながら、風に耐えていた。

がらがら……

一瞬遅れて何かが崩れ落ちてゆく音が伝わってきた。

「ちいっ……はずしたかのう……」

視線を起こすと、崩れ落ちる石像に拳を打ち込んでいるボガードの姿が映った。

崩れ落ちている石像は、日本の古い学校にはよくあると思われる。薪を満載した背負子を背負って本を読んでいる、損しているのか得しているのか分からない名前の像である。

おそらく学園長が建てたものだと思うが、魔法学園を称するミツシヨン系な校名とデザインしている校舎には、この像は極めて似つかわしくない。

そんなことより、今のボガードの攻撃は一体……

「どうじゃ、驚いたじゃろう！ この若い肉体なら再び可能だと思
っておったが…… これなら魔法の効かぬおぬしにでも間違はなく
効果があるじゃろうて！」

肩に乗っている鷹型ラピスからは残り火のような炎が絡まってい
るのが見える。

そうか、ボガードのヤツ、ラピスから高出力の炎を噴射させて、
さながらロケットブースターを背負ったようにして突撃する技を使
ってきたのか……

遅れて飛んできた風圧は、戦闘機のように高速で移動する物体か
ら放たれるという衝撃波だったんだろう。

「ただ単に雷や炎を出すだけが、攻撃のための魔法ではないぞ！」
などと言い放つボガードであるが、それにしても魔法授業などで
普段から『魔法は応用力』みたいなことを言っただけで、こ
れはこれでアリなのか？

確かに、これなら普通の攻撃魔法の類が効かない俺にも効果があ
るだろうけど……って……

「おい、ボガード！ なにばらしてやがるんだ！」

「おっと、しまった…… なあに、聞いているのはそのエマくら
いじゃろうて、さほど気にする必要はあるまい」

いつもならこの手の話題は深刻そうに扱う癖に、若ボガードにな
ってその辺りのネジすらも緩んでいるんじゃないのか！？

理由はまだ分かっていないが、俺には回復魔法などを除く、主に
攻撃魔法の類が通用しない。これが分かったのは世界樹祭の最終日、
セーラの暴走した魔法に直撃された時だった。

このことを知っているのは当事者であるセーラと学園長、ボガー
ドくらいである。無用に喧伝することは妙なトラブルに巻き込まれ
ると判断していたからである。

……そもそも、今のところ分かっているのが、元素型攻撃魔法が
効かないらしいというくらいであり、他の魔法は効果を示す可能性

がゼロではないのだ。単に魔法が効かないということだけが広まったりすれば、絶対、的に使おうというお馬鹿な学生が出てきかねない。

射的の景品になる気はさらさら無い俺が、魔法時間になると人気のないところにいるようになったのは、このためだったのだ。

「ま、魔法が効かない……じゃあ、大樹が魔法の素質が一欠片もないっていうのは……」

「……魔法の効果を持つものに対して、その力をキャンセルすることによる耐性があるらしいということと、その影響が世界樹の実がラピス化出来ずに砕け散ったりすること……つまり、素質があるかどうかすらよく分からない……というのが正確なところだな……」
それでもしっかり回復魔法だけは効果を示すのだから、その適用基準のいい加減さがこの能力の困ったところだ。

今回、エマの魔法と思われるこの若返りの現象が、俺にその効果がないのはこれが原因だったのだろう。

「小僧！ 何をぼさつとしとるか、まだまだ行くぞ！」

「って、そもそも、今はこんな事をしてる場合じゃないだろう！」

この若返りの現象を何とかしなくてもいいのかよ！？」

「ふんっ、貴様に制裁を加えるのが先じゃ！」

くっそお、ボガードの爺め、やっぱり若返った反動で頭のネジが完全に壊れてしまったようだ。

それに加え、もとより爺の癖に体術にやたらと長けていた節があったが、これが若返ったお陰でさらにパワーアップしているようである。

爺の時でさえ、俺と良い勝負だったのだ。若返った今のボガードにかなうとは到底思えない、しかも向こうは魔法で攻撃力を増強しているのだ。

「次なる技はこれじゃ！」

右腕を力強く振り上げるボガードの叫びとともに、再び鷹型ラピスがロケットさながらの噴煙を上げ、今度は垂直上昇し始めた。

俺たちの頭上を校舎の二倍くらいの高さまで上昇したボガードは、一旦その場で停止し……

「ワシの魔力がビートを刻む！ 秘技、ボガード・クラアアアツシュウウウウ！」

肩に乗っている鷹ラピスが今度は上空に向かって、炎を吹き上げ……急速降下してきた！？

や、やべえ！？

「エマ、身構えろ！」

「えっ！？ な、なに！？」

間に合うか！？

俺はとまどうエマを抱きかかえて、コンクリート敷きの路面から、園庭の芝生の上にダイビングをかました。

ドグウウウウー……ン！

身体が園庭の芝生の上でバウンドしたことを感じた瞬間、俺が今までいた場所の近くで爆音が炸裂する。

「げ、ゲフォ、げふお……一体なんなの……」

土煙にむせたエマが顔を上げた。

「シャ、シャレになってねえ……！ 俺たちを本気で消し飛ばす気か！？ あの爺！」

エマを押し倒す格好になっているが、こんなので一々顔を赤らめたりするような俺とエマではない。

俺たちは即座に起き上がり、未だ土煙に覆われている落下地点に目を凝らすと、そこには直径5メートルのクレータが出来上がっている。

地対地ミサイルの次は、衛星落としかよ！？

「さすが小僧、逃げ足だけは達者ときておるな……」

そのクレータを作り上げた張本人は、既にクレータの縁で腕組みなんぞしながらピンピンしてやがる。

この頑丈さはいくら何でもありえねえ！　いくら魔法を使っているからとはいえ、素手でコンクリートを陥没させてクレータ作るなんて物理限界越えているだろうこれ！

「だ、だいたい、これが魔法使いの戦い方かよ!?」

「まあ、このわしの戦い方はわりと垂流じゃな。何せ、昔戦いに明け暮れていた頃は、お主のように魔法が全く通用せん相手というのも僅からながらおったしのう」

ボガードは顎に手を当てながら言った。髭があれば、いつも通る手で梳すいていたことだろう。

旗色は悪いとかそういうレベルじゃない。こうなったら取る手はただ一つだ。

「……エマ」

「ええ」

俺とエマはうなずき合うと……

「逃げるが勝ちだ!」

急旋回で回れ右し、脱兎の如く駆け出す俺たち。こんな化け物、真っ正直に相手にしている場合じゃない。

「ぬう!?　逃がさん!」

俺たちが走り去った場所に再び轟音が響き、新たなるクレータが出来上がったようである。

ドグウウウウー！　ドグウウウウー！

ドグウウウウー！

逃げ回る俺たちの後ろでいくつもの爆音が重なり、もはやいくつのクレータが出来ているのか数えることも出来ない。

未だにクリーンヒットしないところを見ると、学園内1・2を争う体力馬鹿二人の逃げ足にはさすがのボガードも的を絞りきれないようである。

ドグウウウウーローン！

「うぐっ!?」
「またもボガードの技が炸裂した轟音が真後ろで響いたのだが、

鈍い衝撃が背中に伝わりと同時に、そこから激痛が体中に走り、俺はその場にうずくまってしまった。

恐らく、炸裂した瞬間に飛んできたコンクリートの破片が当たったのだろう。

「だ、大樹!? し、しっかりして!」

「ほお〜ほほほ、遂にとらえたぞ!」

俺に駆け寄るエマと上空から高らかに叫ぶボガードの声が同時に伝わってくる。

「とどめじゃ! 吹き飛ばえええ! こぞおおおおおう!!」

「まずい! エマは早くここから離れろ!」

俺はうずくまったまま、エマを促した。ここには間違いなく巻き添えを食う。俺は頑丈だから多少のダメージを受けてもなんとか耐え切れそうだが、エマはそうも行かない。

「ボガード・クラアアツシュウウ!!」

律儀に技名を叫びながら、ボガードの爺はお構いなしに技を放って来やがった。

「だ、大樹いいいいい!!」

キイイイイイーローン!

エマの叫びとともに、光り輝く何かが俺と急降下してくるボガードの間に凄まじいスピードで駆け抜けていった。

「なんじゃ!?!」

「あれは……!」

地面に拳を突き立てるタイミングを逸したボガードは、そのままゆっくりと地面に降り立つ。

これは……

「エマのラピス……」

「なっ!?　せ、生物形態のラピスじゃとお!?」

俺たちの前に飛び込んできたのは、エマの発現したラピスである、白い光を帯びた鶴みたいな鳥型ラピスであった。

それを見たボガードが驚きのあまりその動きを止める。まあ、いきなりラピスが発現した上、それが生物形態だったのだから驚かないはずはない。

それにしても、一体どこに行っていたんだコイツ……

「え、助けてくれるの……?」

『グアーーーーー!!』

鳥はエマを守るように翼を広げ、その問いに一鳴きで答える。

その鳴き声に呼応するかのように、エマからは魔法の使えない俺にも感じ取れるくらいの相当強い魔力が放たれはじめていた。

「それじゃあ、行くわよ!　アーティカルバイス!!」

フオオオオオオオオオオン!

その言葉を合図に、エマから放たれている膨大な魔力光とおぼしきオーラが、その鳥のくちばしの先で巨大な魔力の固まりへと形成された。……のだが……

「で、でけえ!?!」

「なんじゃ!?　この強大な魔力の高まりは……!」

その大きさはセーラが以前作り出した火球なんて足下にも及ばない、薄い紫色を帯びた巨大な光の弾がエマと鳥の目の前に居座る。

「いけえええええ!!」

エマの掛け声とともに光球がボガードに向かって駆け抜けてゆく。そのスピードもさることながら、弾道下にある地面をえぐり取りながら突き進むその威力はシャレになっていない。

「こ、こんな中途半端な制御しかされていない魔力球なんぞ弾き返

してくれるわ！」

迫り来る強力な魔力弾を前にして、ボガードは自分の掌を突き出して叫ぶ。

「その昔、『閃光の魔法戦士・ライトニングボガード』の異名をとったこのワシにかなうと思ってか！」

あり得ないほど偉く大層な異名である。しかも、どう聞いてもやっぱり特撮ものに聞こえるのだが、昔から魔法世界にはこのようなネーミングセンスが存在するのだろうか？

「ぬおおおおお！！」

全身に力を溜め込むような体勢をとると、またしても新たな技なのか、普段は肩に乗っている鷹ラピスが今度は腕に止まり、その腕の掌手をボガードは魔力球に向ける。

ボガードが掌手を突き出すと同時に、ラピスから螺旋状の炎が射出された。

「風と炎を収束させた噴射を用い、高出力の推進力を得ることによって強力な掌手を放つこの技をとくと見よ！」

わざわざ解説を入れるところからして、ボガードとしても自信のある技なんだろうが、それって所謂手のひらを開いたロケットパンチの亜種じゃないかと思ったぞ。

「奥義！ ボガード・ライトオオオニングウウウフアアアツシウウウウ！！」

ドグウウウウン！

エマの魔力とボガードの技との衝突によって生み出された衝撃が、地響きを伴って辺りを包む。

ボガードは高加速を得た掌手でエマの巨大な魔力弾を押さえ込んでいる。

「ぐううううう！ なかなかやりおるわい！」

「と、鳥！ わたしのラピスでしょ！？ 頑張りなさい！ わ、わ

たしも……わたしも、もつと……もつと頑張るから!!」

余裕の笑みすら浮かべているボガードに対して、ラピスを鼓舞しながらエマも魔力弾への魔力の供給を続けて応戦するが、如何せん出力に違いがありすぎた。

「や、やっぱり、付け焼き刃じゃ駄目かな……」

次第に魔力弾の推進力が落ちてきている、このままではエマの方に魔力弾が押し返されてしまうだろう。

何か手はないか……!?

そのとき、ボガードの腕に留まって炎を噴き出し続ける鷹型ラピスが目に映った。

「エマ! もう少し耐えてくれ!」

俺は背中にある痛みを堪え、ボガード目掛けて猛然とダッシュをかける。

「何をする気じゃ!?!」

ボガードは魔力弾を弾き返そうとして動きが止まっている。このスキを逃すつもりはねえ!

「こ、こういうことだああ!!」

俺は魔力弾を押さえ込んでいるボガードの腕の下をぐり抜け、鷹ラピスの口を素手で押さえ込んだ。

ラピスから吹き出している強力な炎は、俺の手の中であっけなく消え去る。

「ば、馬鹿なあああ!?!」

本来、これだけの高出力を伴った炎に触れたりしただけでも弾き飛ばされそうなものだが、俺の魔法を打ち消す能力を用いればたちまち消え去ってしまう。

俺はそのまま鷹ラピスをつかみ取り、ボガードから引き離す。思ったよりもあっさりととれてしまったため、俺はすっぱ抜けるように思いつき地面に転がってしまった。

そして、推進力を完全に失ったボガードは魔力弾を押さえきれず

……………

「ぬおおおおおおおー！ー！ー！？」

ドゴオオオオオオオオオオオー！ー！ー！ー！

エマの魔力弾に激突されて、巨大な火柱に包まれる。

かくいう俺も爆風に弾き飛ばされて、地面をごろごろと転げる羽目になったが。

「や、やったあ……」

魔力弾が消え去った後、エマがその場にへたり込んでいた。

「す、すげえぞ……エマ……」

俺はボガードのラピスを抱えて起きあがる。

先ほどまでボガードが立っていた場所には、巨大なクレータが口を開けていた。ボガードがある程度押さえ込んでいただろうから、威力がそれなりに落ちていただろうが、それでもこれだけの破壊力とは恐ろしい……

『ピ、ピィピィピィー！！』

突然、俺の腕の中で鷹ラピスが、その姿にまるで似つかわしくない、ヒヨコのような叫びを懸命に上げて暴れ出した。

「どうしたんだ？ コイツ……」

俺とエマが顔を合わせて首を傾げていると、

「い、いかん！ 小僧、ラピスを離せ！」

いつの間にかクレータから顔をのぞかせていたボガードが叫ぶ。やっぱり、コイツ生きていたか。

「そのラピス、なんか苦しそうにしてるように見えるんだけど……」
確かに酸素を求めて暴れる動物みたいにも思えるが、別に首を絞めていたりしないぞ、俺は。

「小僧！ 貴様ワシのラピスを破壊する気か！？」

「……あゝ……」

必死のボガードを見て、あることに思い当たる。

俺の魔法消去能力は、かなり頑丈といわれている世界樹の実をあ

っさり打ち砕く。発現していないラピスをアクセサリ越しに触れる程度ならいざ知らず、発現状態で膨大な魔力を帯びているラピスに俺が直接触れたりしたら……

俺が手を緩めると、ボガードの鷹ラピスは『ピーーーーーー！』という悲しい鳴き声を残して、恥も外聞もなくどこかへ飛び去ってしまった。

「ふう…… 危うくラピスを失うところじゃったわい……」

さすがのボガードもやつれた顔をのぞかせた。やっぱり高名な魔法使いと並び称されているボガードといえども、ラピス無しになるのは勘弁願いたいといったところか。

「あ…… ラピスが……」

俺たちが見ている前で、エマの鳥ラピスが次第に光りを失ってゆく。

その姿が消えた後、エマの手の中にバイオレットフロライトの輝きを持つあの石があった。

「ありがとう、力を貸してくれて……」

エマは自分の元に戻ってきたラピスを軽く握りしめると、その胸に抱く。

そして……

リンゴーン…… リンゴーン……

魔法時間が終わる……

ALERT

響き渡る鐘の音の中で、世界を染め上げていた不可思議な光りが消え、元の色彩を取り戻してゆく。

長らく続いた魔法時間が今終わったのだった。

「ぬおおおおお！ わ、わ、わしのおおおおおっ！ フ、フフフ、フサフサの髪があああああ！？」

目の前で頭を抱えて喚くボガードの爺は、まるでビデオの早送りをされているかの如く、猛烈なスピードで老けはじめた。

それに従って徐々に髪の毛は次第に失われて行き、しわだらけの頭皮が現れる。

「……よかった……エマの魔法、魔法時間が終わったら効果が切れ
たか……」

「……それにしても、老けてゆく様を見せられるのは、正直いい気がしないな……」

俺たちがこんなに老化するのはまだ先ではあるにしろ、自分たちだって少しずつ年を取ってゆくのは間違いないわけで。

「大樹は、絶対にあんなにならないようにしてよね」

髪の毛を失って大絶叫と狼狽を繰り返すボガードを指さして言うエマ。

「……………なると思うのか…………？」

そう思われていたとしたら、相当ショックだぞ、エマよ。

「なんていうか、あのボガード先生も昔はこんなじゃなかったよ
うな気がするのよねえ」

確かに、あれだけ美形ならばこんなに性格がDNAの二重螺旋の如く歪む必要もないわけで、一体ボガードの過去に何があったのか
気になるところではあるな。

「そうね、人なんてちょっとしたキツカケで容易く変わってしまう
ものだから」

「！ その声は、学園長！」

「セーラに優花先輩も、元に戻れたのね」

いつの間にか俺たちの周りには、元の姿に戻った学園長とセーラ、そして優花先輩が立っていた。

しかし、その三人の顔に張り付いた表情は様々で、学園長はいつものニコニコ顔なのだが、セーラはふて腐れた不機嫌顔をしており、優花先輩は心底残念そうながっかり顔をしているのが気になる。

「大樹君、ずいぶん派手にやられたみたいね…… セーラと九条さんは大樹君を手当てしてあげて」

学園長はそれだけ言うと、未だに喚いているボガードの目の前に立つ。

「……ボガード」

「げえっ！ エ、エルダ……」

たちまち大人しくなり、見るからに小さくなるボガードであった。相変わらず、学園長が睨みを利かせると怖いらしい。

「さて、この始末どうしてくれるのかしらね……？」

学園長は園庭をなぞるように広げた掌で指し示しながら、ボガードを詰問する。

なぞられた先の園庭には、あちらこちらにクレータが穿たれ、庭木は焼けこげすっかり丸坊主、石像はバラバラに碎け散るという見るも無惨な姿を晒していた。

「それは髪が、髪が生えおったので、つい調子に乗ってしまったのう…… それにあの生意気な小僧が……」

消え入りそうな声で、言い訳にならない言い訳を並べるボガードだが、全く説得力はない。

……しかし、年が元に戻ったことより、頭から毛が消え去ったことの方がショックが大きいらしいな……

「言いたいことはそれだけね？ では、きちんとしっかり責任は取ってもらいましょうか、ボガード。あなたに今日から二日以内でこの場を修復することを命じます。良いですね？」

「ふ、二日!?　いくらワシでもそんなことをしたら、ぶっ倒れてしまうわい!」

「……出来ないとしても……?」

慌てふためいて抗議するボガードであったが、有無を言わせない学園長の笑顔を見て沈黙させられた。

にっこり笑って押し通す学園長の顔は正直怖い。さすがこのセーラの母親である。

「……ところで、セーラ。なんでそんなに不機嫌そうなんだ?」

「な、なんでもないわよ!」

顔を真っ赤にしながらも、手当はちゃんとしてくれるのがセーラらしい。

「それがねえ、わたしが小さくなったセーラちゃんを可愛い、可愛いってだっこして撫でたら機嫌悪くなっちゃったんだよ」

「せ、先輩!　そんな変なこと言わないでください!」

今の会話で、優花先輩が俺たちと分かれた後、学園長達と合流してから何があったのか、何となく想像出来たぞ。

泣きわめいていた優花先輩だったが、自分よりも小さくなったセーラを見て、そのお姉さんぶりをいかに発揮し、なで回し上げるという構図が。

俺たちには運の良いことに、それによって機嫌を直した先輩は、先ほど会ったときの件はすっかり忘れているようである。その点はセーラに感謝しなければ。

「そ、それにしてもボガード先生も不味いことをやってしまったわね……」

あからさまに話を切り替えるセーラだが、こちらとしてもこれ以上の追求はやぶ蛇になりかねないのでその流れに乗った。

「それはまあ、これだけ大暴れしたんだしね……」

「いいえ、単に大暴れしただけなら、一週間くらいの期限になっていたわ、きっと」

「三分の一以下に日数が減らされる事って……?」

そもそも、魔法が無ければ一週間でも修復は無理だろうが、それでもそこまで期限を減らされる理由とは一体……

「あれよ、あれ。あれさえ壊していなければもう少し猶予をもらえたでしょうにね」

セーラが指さす園庭、その先にあるのは……

「もしかして、こっちの世界で作られたあの石像のことか……？」

セーラが指さす場所は今はただの瓦礫の山と化しているが、あの若ボガードが初撃で破壊した二宮尊徳像が建っていた場所である。

「そう、あの像はお母様……いえ、学園長のお気に入りだったのよ……相変わらずよく分かんセンスである……」

「曰く、『仕事を抱えながらも、勉学に励む姿を素晴らしく表現している』……とのことよ」

「なるほどお」

何故か優花先輩が感心しているけど、先輩、アレはこちらの世界ではさほど珍しい品じゃないと思うのですが。

まあ、最近の学校に建っていることはまれだろうけど。

「とりあえず、みんな元に戻れて良かったよ……」

「本当ね、エマの人騒がせな魔法のお陰で散々な目に遭ったわ……」
心底やな顔をして、ため息をつくセーラ。まあ、学園長に優花先輩にと絶え間なく子供扱いされたんだから、プライドの高いセーラからしてみればたまったものではないだろう。

「わ、わざとやったわけじゃないわよ！ あゝ、もしかしてセーラ、わたしのラピスが生物形態で発現したのを妬んだりしてるんでしょう！？」

「そんな安っぽい感情をあなたに抱くはずがないでしょう！ 見てください！ 私だって直ぐにでも発現させてみせるわ！」

「ふふゝん、それじゃ明日にでもお披露目してもらえるかしらね？」

セーラの発現したラ・ピ・スっ

「きゝゝゝゝゝい！」

顔を真っ赤にして金属音のような歯ぎしりするセーラと、余裕た

つぷり顔をして語尾にハードマークでもつけかねない勢いでセーラを挑発するエマ。見ているこっちが酸欠で窒息しそうなほどのとても息苦しい、一発触発の睨み合いが展開されている。

なんか以前にも同じようなことがあった気がするんだが……

「あら、あなた達、無事だったの？」

エマとセーラの睨み合いが続く中、いつの間にか俺たちの担任であるミレーヌ先生もやって来ていた。

「先生の方こそ大丈夫だったんですか？」

「わたしの方は、学園生くらいのところに……。でも、若返ったのは魔法時間が終わる少し前だったから」

『ミレーヌ先生の学園生時代』というのはちょっと見てみたい気がするけど、元々俺たちとそう年齢が離れているようには見えないので、見た目に差を感じられたかは分からないだろうな。

「他にも影響のあった学園生たちも、ちよつとした若返り程度で済んでいたみたいだから、被害はさほどのものではなかったわ」

それを聞いて俺たちは安心する。さすがにこの若返りの影響で他に怪我人とかが出てたりしたら、ただでは済まなかっただろう。

「とりあえず、一件落着か……」

「きゃああああー！ー！ー！ー！」

「こ、この変態！ こっちに來ないでえええええー！ー！」

そのとき、校舎の裏手の方から、女子学園生達の声と思わしき叫び声が次々と響き渡った。

「や、やめてくれえええゝ こ、これは不可抗力なんだよおおおお！」

その後に響く、男の声……ってこれ、アルベルトじゃないのか？俺たちが校舎の角に注目すると、女子から石やら文具やらを投げつけられながら、半泣きで校舎の裏手から駆けだしてくるアルベルト。

全力投球しちゃったよ……

あれでは、アルベルトには弾道が全く予測できなかっただろう。

「ぞ、ぞぞぞ、どうさんが……　　どうさんが……」

悲劇の張本人は頭を抱えて怯えていたりする。ミレーヌ先生はああいうのはあんまり免疫無さそうな気はしていたけど、ここまでは……

「なんで、大樹まで股間を押さえているのよ？」

「……エマよ、あの痛みは女性には一生分からないものだよ……」

インパクトの瞬間、見ていたこっちの股間にも痛みが走った気がしたぞ。

しかし、白昼堂々、男の露出狂なんぞ見せられるのはたまったものじゃないな……

「……それで、これどうするの……？」

思ったより耐性があった優花先輩が、痛々しいことになってしまったアルベルトを指さしている。

「……このまま放っておくわけには行かないんだがな……」

素っ裸の男を抱えて歩く趣味は俺には無いが、まさか女の子達に担がせるわけにも行くまい。

「とりあえず、素っ裸なのは何とかしないと……」

わりあい暖かい氣候をしているこの島ではあるが、季節はまだまだ冬まったただ中である。さすがにこのまま放置しておく風邪では済まされないだろう。

「それじゃ、わたし保健室から毛布とってくるよ」

そういつて優花先輩は、俺が返事をするよりも先に、校舎へと小走りで向かっていった。

「どうかしたの？」

入れ替わりに少し離れてボガードを説教していた学園長が戻ってきた。

「いや、アルベルトが倒れちゃったので、どうしようかと……」

ちなみに、セーラは嫌悪感を包み隠さずの丸出しで顔を背けてい

るし、エマの方もさすがに直視する気はないらしく、明後日の方向を見ている。

「仕方がない……優花先輩が毛布持ってきたら、俺が担いでゆくか……」

「あら、そんなの……ボガード、よろしくね？」

学園長が後ろで盛大に凹んでいるボガードを軽い口調で促した。

「な、なんじゃと！？　なぜわしがそんなのを担がねばならんのじゃ！？」

当然の如く、猛烈に抗議するボガードである。

「学園内で倒れている学生を助けるのは教師の役目よね？」

「ぐう……　こ、小僧……貴様のせいじゃぞ……」

ボガードが恨みがましく俺を睨むが、俺はそれを意に介せず、
「自業自得だろう」

と、一言で切り捨てる。いつまでもスケベ爺を相手にしているほど俺は暇人ではない。

「さてと、俺はアルベルトの制服を拾いに行ってくるか……」

ちなみにセーラと優花先輩の手当もあって、身体から傷や痛みはもうほとんど無くなっていた。

「あー、わたしも行くー」

世界樹の方に向かおうとする俺にエマがついてこようとする。

「そういえば、ボガード先生のラピス、どこに飛んでちゃったんだろう？」

エマは、倒れたアルベルトをどうやって運ぶか思案しているボガードの肩を見ながら言った。

俺の手の中から緊急脱出を実行した戦闘機の座席よろしく、真一直線に飛び去ってから姿を見ていない。

普段ならもうボガードの肩に戻ってきてても良さそうなものだが。

「ワシのラピスじゃと……　ほれ、あそこにおるわい……」

ボガードの爺は疲れた声で呟きながら、少し離れた木の枝を指さした。

その枝の上に鷹型ラピスが留まっているのだが、あからさまに怯えている気配がこちらまで伝わってくる。

人間なら青筋立てて、震えている……と言ったところか……

「さつき小僧に捕まえられてからというものの、身の危険を感じるようになってのう…… すっかり小僧に怯えるようになってしまったわい……」

正に踏んだり蹴ったりとはこのことだろう。まるっきり自業自得には間違いないのだが、ここまで酷いとさすがに同情の念を覚える。ほんの微かにだが。

「あゝあ、本当にいろいろと、とんでもないことになっちゃったわね……」

「……騒ぎの張本人が何を言うか？」

「だってしょうがないじゃない、わたしの意志じゃなかったんだし…… それでも、まあ一応魔法は使えるようになったみたいだから結果オーライということ……」

エマはスカートのポケットに入れていた、その自慢のラピスを取り出そうとした。

「あ、あれ……？」

エマの顔色が青く染まる。それも見事なくらいの蒼白に。

「……どうかしたのか？」

「ラ、ラピスが……な、ない！？ さつきまでこのポケットの中にあっただのにっ！」

「なんだって！」

エマは慌てふためいて、ポケットの中の奥深くまで手を突っ込んだが、その顔からは手応えがあったようには見られない。

落としたとしても、一体どこに……

「あ……これは……」

他のポケットも確認していたエマが、手のひらを反して俺の前に差し出した。

「これ、世界樹の実じゃないか……」

それは紛れもなく、昨日世界樹から落ちてきた世界樹の実そのものであった。

「ラピスの代わりに、ポケットにこれが入っていたの……」

「まさか、ラピスが世界樹の実に戻ってしまった……ということか？ そんなことあるのかよ……」

「残念ながら、あり得ない話じゃないわね」

深刻そうにしている俺たちのところに、学園長が近寄ってきた。

学園長は、エマの手の中にある世界樹の実にそっと指を触れる。

「この実からはまだ魔力を感じるわ、これは先ほどまでラピスだった実に間違いないと思うわね」

学園長はいつものように腰に手を当てながら、難しい顔をして言葉が続ける。

「ラピスはその所持者が亡くなったり、魔力を失ったりした時、元の世界樹の実へと戻ってしまう場合があるのよ。ねえ、ボガード」

「うむ、まあな……」

明後日の方を向いているボガードは、どことなくばつの悪そうな顔を声のみで返した。

「そんな！ じゃあエマの魔法の力は……！」

「大丈夫よ、エマさんの場合、一度に強い魔力を放出してしまった反動で一時的に魔力ゼロの状態に陥っているだけだと思うから、まだ若いのだし、しばらくすれば元に戻れると思うわ」

「そ、そんな……」

学園長の言う希望の言葉も、すっかり意気消沈してしまったエマにはなんの慰めにもならず、肩を落としてうなだれていた。

あれだけ喜んでいたのに、最後にこれでは何を言って慰めていいのか、そのときの俺には見当も付かなかった……

EMERGENCY

「あゝあ、結局、狐か狸にでも化かされてたみたいね」

ラピスが世界樹の实に戻ってしまったショックをまだ少し引きずりながらも、俺とエマはアルベルトの制服を回収しに世界樹の袂に戻ってきていた。

今日一日、外見だけ若返るというあのエマの暴走した魔法も含めて、何かに化かされていたというのは当たっているかもしれないな。

「そういえば……黙ってて悪かったな」

「？ 何のこと？」

「俺が魔法を使えないんじゃない、魔法を無力化する力があることのことさ」

もうばれてしまっているの、正直に話しておいた方がよさそうだと思ったのだが、

「知ったってしょうがないじゃない、それで今更序列が変わるわけじゃないし……」

「あはははは…… エマらしい答えだな」

と、まったくもってエマらしい答えである。どちらにせよ魔法が使えないのは変わらないのだから、同じ事というわけだ。

「それよりも大樹、今日はありがとね」

「それこそ、何がだ？」

思い当たる節は全くないわけではないが、一応確認を入れる。

「一日中、引っ張り回しちゃったこともあるけど、やっぱりボガード先生が暴走したときかな？」

「おいおい、あるとき俺はほとんど逃げるしか出来なかったぞ、最後はエマが魔法でケリつけただけだし……」

まあ、ボガードのラピスを掠め取ったことが勝因の一つであるこ

とは間違いないと思うが、エマの魔法があつてこそだったことは疑いようの無い事実である。

「そういえばあのとき、ちゃんと魔法使えたよな？ あれってどうしてなんだ？」

エマが魔法の授業をともに受けたのを見たことのない俺としては、どうしてもそこだけが腑に落ちなかった。

「うーん、さっきのは無我夢中だったということもあるけど……昨日話したでしょう？ 入学したての頃はわたしもわりと真面目に魔法の勉強してたのよ」

——入学してからしばらくは、他の人の魔法訓練を見たり、
世界樹の実を光らせてラピス化しようとした
り——

昨日、世界樹観測施設のベンチで聞いたエマの言葉を思い出す。

「そういえば、そんなこと言ってたか……」

しかし、そのときのエマはどんなに頑張っても魔法が使えるようにならず、結局今の今まで諦めてしまっていただけだったのだ。

「簡単な魔力弾程度の作り方なら、初めの頃の授業の内容にあったから。まあ、さっきのはぶっつけ本番だったけど、まさかあんなのが出来上がるとはわたしも思っていなかったわよ」

それでも学んだことは無駄にはならず、それがあの土壇場で生きたわけだから、過去の努力もいつかは報われる時が来るのかもなあ……

「それにしても、ラピスはまたしばらくお預けかー 前よりも希望があるといっても辛いわよね……」

力を失ってしまった元ラピスである世界樹の実はそのまま持っているように学園長から言われているものの、いつまた光るようになるのかすら分らない。

……そういえば、ラピス……ラピス……！？

「ああああー！ー！？ し、しまったああああー！ー！ー！！」

「ど、どうしたのよ？ 急に大声なんて出しちゃって……」

「そういえば、すっかり忘れてた……！！！」

肝心なことを今更ながら思い出して、俺は慌てて上着の内ポケットを懸命に漁る。

「……確か、ここに入れておいたはず……っと、あったあった……」

俺が取り出したのは、手のひらに収まる程度の小さな紙袋である。俺は中身を検めてから安堵のため息を一息飛ばした。

「よかった、中身は無事か……」

さっきの大騒ぎでこの中身が破損していた可能性も十分考えられた。

「なにそれ？」

「……うーん、まあ、いいか……ほれ」

俺はちよっと思案してから意を固めたが、さすがに面を向いてでは照れくさくなったので、そっぽを向きながらエマに紙袋を手渡す。

「え、わたしに？」

「他に誰がいるんだ」

エマはそれを受け取り、紙袋を傾けて中身を手の中に納めた。

「え、ええええ……！！？ だ、大樹……！！ こ、これって……！！」

中から転がり出てきた内容物を確認し、エマがびっくり箱を中途半端に開けたような声を上げた。

「ああ、ラピス用のアクセサリだ」

銀のガントレット型のラピスアクセサリ、それが俺が手渡した紙袋の中身。

ガントレットといっても、どこぞのファンタジーゲームに出てくるような、ゴテゴテした厳つい代物ではなく、手の甲だけを金属で覆うような小さなもので、その甲部分の中心にラピスをはめ込む形になっている。

ちなみに、これは本当に防具として用いるものではなく、あくまでアクセサリであるため、シンプルながらも装飾が施されており、存在するのも左手のみのものだ。

「これ、いったいどうしたの……?」

「……昨日買った。妹の小雪に頼んで、店に連れて行ってもらったな」

さすがに恥ずかしくなったので、俺はぶっきらぼうに答える。

昨日、小雪の用事につきあった後、ラピスアクセサリを扱っているお店を教えてもらったまでは良かったのだが、「何のために行くのだ? 誰に渡すのだ?」とか根掘り葉掘り小雪から追求されることとなった。

そのアクセサリ選び自体も、選ぶのを手伝うという大義名分を振りかざされ、強制的に同行されることを余儀なくされる。

挙げ句の果てには、『口止め料』なる不当な要求と脅迫を受け、泣く泣く小雪にもアクセサリをお買い上げされる(当然予算の出所は俺)という、惨劇に見舞われた。

そんななけなしの財力の劣化と妹からの精神攻撃を伴った苦労(?)して入手したものだっただが……

「これも結局無駄になっちゃったなあ……」

俺は、エマの手の中にある銀色のアクセサリを見つめながらため息を吐くしかなかった。

どうせなら、ラピスがちゃんとしていたときに渡せば良かったのだが、あの騒ぎですっかり失念していたのだ。

「大樹……」

アクセサリを握りしめ、いつの間にかエマは俯いていた。

「……ん?」

「だ、大樹の馬鹿ああああー!」

至近距離で耳をつんざく叫び声を当てられる。耳の中でキーンと

いう音がし、頭痛を伴って非常に痛い。

「ちょ、なんで……」

エマは俺が言葉を紡ぐのを遮るかのようにして、ビシッと俺の口元に人差し指を指す。

「ちよっとつ、女の子に贈るプレゼント選びに本人同行させないなんてどういうことよ!」

「あ、ご、ごめん……」

さすがにそこまで頭が回らなかった。そもそも昨日はエマがあったという間にどこかに行ってしまったこともあるが、早く渡せた方がいいかと思っていたこともある。

「しかも、妹とはいえ他の女の子に選ぶのを手伝わせるだなんて! デリカシーの欠片もないわね!」

しかし、プレゼントを贈ったのに、ここまで罵詈雑言の文句を並べ立てられるとは……さすがに凹むな……

あからさまに俺は意気消沈して、肩を落としたのだが、
「……なぐんてね。冗談よ、冗談。そんなに落ち込まないでよ。第一このわたしがそんなこと気にするとも思ってるの?」

そういつてエマは握りしめていたアクセサリを左手にはめる。

「……そういう、ものごつつ質の悪い冗談は極めて心臓に悪いからマジで勘弁してくれ……」

さすがに今のは泣きたくなったぞ、エマ。

「といっても正直驚いてちよっと動揺しちゃったけどね」

素晴らしいながら、エマはアクセサリの装着具合を確かめていた。

「どう? 似合うかな?」

エマは、アクセサリをはめた左腕を翻して俺に見せる。

「ああ、エマに似合うと思ったのを選んだんだから、見るまでも無いぜ」

などと俺は自信たっぷりに返したが、実のところ、このアクセサリの選択には相当難航を極めていた。

『あれでもないこれでもない』という小雪の横やり波状攻撃も判

断を迷わせる一因とはなっていたものの、そもそも俺はアクセサリなんて選んだこともない。

結局、「活動的なエマに似合うもの」というのを条件に消去法的に選んだのが、このガントレットだったわけだ。

「そっか……」

エマはアクセサリに顔を近づけ、まじまじとそれを見つめている。

「……これで、少しは……みんなに近づけたかな……?」

小声でエマが何かを呟いていたが、俺には聞き取れなかった。

「何か言ったか……?」

「ううん、なんでも」

「ま、そのアクセサリをつけたエマの魔法服姿にも期待しているぜ」
おどけた口振りで俺は言う。見てみたいのは正直なところだけだな。

「そんな、アルベルトみたいなこといわないでよ」

俺の軽口にも、エマは穏やかな微笑みを返して答えた。

「……期待しちゃ、駄目か?」

「うーん、分かったわよ、真っ先に大樹に見せてあげるから」

エマのその姿を見て俺は内心安堵していた。

……良かった……ちよつとは元気が出たみたいだな。一時的にとはいえ手に入れたラピスを失ったエマからはどことなく空元気みたいなものを感じていたから。

「大樹」

「ん?」

ちゅっ

「……え……?」

気が付いたときには、目を閉じたエマの顔が真っ正面至近距離に

あった。

柔らかい肌と肌が触れあった微かな音が、俺の頭の中で大きなうねりとなってリフレインしている。

一瞬の後、エマが俺から離れ、

「えへへへ……」

と、頬を微かに赤らめながら、舌を微かに口から覗かせてイタズラの成功した子供ののように微笑んでいた。

「これが、わたしからのこのアクセサリと……その他いろいろのお礼」

……完全に不意打ちだった。

分かっているけど避けるなどということは露にも思わなかっただろうが、俺は何の身構えもなくそれを受け取ってしまったのだ。

「念のため言っておくけど、これはわたしのファーストキスなんだからすつごく貴重なのよ!」

エマは俺から一步離れると、先ほどと同じように俺を指さして豪語する。

「あ、ああ……えっと、ありがとう……」

一体どう言えば良かったのか咄嗟には皆目見当が付かず、俺は辛うじて間の抜けた礼の言葉を返していた。

いかん、この状況は全く想定していなかったぞ。

内心完全に狼狽えまくっている俺をよそに、エマは口を尖らせ、「どーも、反応薄いなあ」 ひよつとして嫌だった……?」

少々顔を曇らせていた。

「いやいやいや! 全然全くそんなことこれっぽちも一欠片もないぞ!」

素直に嬉しいのは間違いないのだが、ハッキリと言葉にして伝えるのは難しいし、照れくさかった。

というか、俺がこれだけ慌てふためいているのに、思ったよりも平気そうにしているエマの方が不思議である。

「よかった…… それじゃ、これで大樹へのお礼はおしまい!」

そのまま、「めでたしめでたし」とでも言いかねないエマであった。

そして、弾けるようにエマは世界樹の方に向き直り、先ほどまで俺のことを指していたその指を世界樹へと狙いをつける。

「絶対にもう一度認めさせて、わたしのラピスを取り戻してみせるからね！」

世界樹に向かって声高らかに宣言するエマ。

「大樹、これからまたしばらくは、魔法の使えないもの同士、また仲良くやってゆきましょう」

「あ、ああ……」

エマは、まだ頭が混乱しまくっていて状況を正常に認識し切れていない俺の手を取り、

「さあ、行くわよ！」

学園の方に向かって駆け出した。

俺はエマに手を引かれ、その左手で揺れる、本当なら紫色の輝石が収まるはずだったラピス不在のアクセサリを見つめながら、

「ま、いっか……」

軽いため息とともに、世界樹の袂を駆け抜けていった。

物語はもう少し続いてゆく、

世界樹の袂、魔法学園、この島……

そして、この青く澄み渡る果てしなき空の下で……

■ おまけ

世界樹を365日、おはようからおやすみまで見守る世界樹観測施設。

この施設の主であるセシルが、魔法時間終了の鐘を鳴らし終え、室内に戻ってきていた。

「……寝てますね……」

いつもの抑揚がない口調に若干のとまどいがあった。

「ふにゃあ……大樹さくん、こんなに小さくなっちゃってえーかわいいですぅ♪」

幸せそうな寝言をたてるアリシアがティーカップが並べられたテーブルの上で微睡んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6672v/>

Emergency

2011年8月17日03時22分発行